# 人形症候群

あねもい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人形症候群

【Ｎコード】
Ｎ４２８３Ｘ

【作者名】
あねもい

【あらすじ】
赤い満月の晩に人が消え、新月の晩に姿を現す。
――死体として。
赤い満月、霊が贄を求めたその日、月は赤く笑いだす。今宵喰われるのは誰だろうか。
突如発生した謎の病「人形症候群」　次第に感覚が麻痺してい

き、動かなくなる。そして最後には昏睡状態に陥る病。

赤い満月と人形症候群。
この二つを結ぶのは“霊”
霊に憑かれた者はこの病を発症する。治療法のない謎の病。進行すれば自身も人形になってしまう。

それを食い止めるのはただ一つ。自らの体に宿る霊に“贄”を与えること。

霊の力を具現化することができる者、それは人形症候群の患者のみ。
具現化した力は強大な力と引き換えに、対価を伴う。

「自ラヲ生カスタメニ、他ノ魂ヲ喰ラエ」

人形症候群の進行を遅らせるには他の魂を贄として、自らの霊に喰わせるしかない。

だが、人形症候群と赤い満月が織り成す惨劇は始まったばかりだった。
偽りの真実、真実の偽り、それらが交わる時、その先に見たものとは――。

## 赤い満月

【満月の晩の悪夢、失踪者再び！？】

青年が見ている新聞の見出しにはそう大きく書かれていた。大きく乗せられた写真には、赤い満月が映っている。平面の写真だというのにその月の禍々しさは一辺たりとも曇ってはいない。それどころか怪しく光り、どこか神々しささえ感じてしまう。月は人を惑わせる力があると言うが、この月はそれ以上の、もっとよくない力を持っているように感じられた。

「あっ、僕その話知ってるー！」

小さい足音とともに、子供らしい高い声が青年の耳に届く。読んでいた新聞をたたむと青年は、癖毛のブロンドヘアの少年を軽く睨んだ。

「またお前か、シータ」

「またって…、僕この酒屋の息子で店員なんだからさ。それよりゼフィさんってオカルト好きなの？」

小汚いテーブルに豪快に置かれた酒は、小さな水飛沫をあげて更にテーブルを汚す。親が親なだけに子も子だ。ゼフィは小さく溜め息を吐きながらも、置かれた酒を一口だけ飲んだ。

「別に好きじゃねぇよ」

「じゃあ何で読んでるのさ？　ここ最近そういった記事ばかり。そ

ういうのが好きだからじゃないの？」

にこりと無邪気に笑うシータの裏に何か黒いものをゼフィは見た気がした。水晶のような蒼い瞳を細めて、ゼフィはシータを睨みつける。

「お前、最近人の周りをうろちょろしてると思ったら……、そんなこと調べてたのかよ？」

怒ったような、しかし半ば呆れたような声でそう言うと、シータは自慢げに胸を張った。

「そりゃ当ったり前だよ！　ここは【黒の街路地】ブラックストリート！！　荒くれ者の溜り場の無法地帯。ここで生きていくためには“情報”が命！！　特に得体の知れない人のとか、ね？」

ちらりと淡い緑色の大きな目がゼフィを見上げた。おそらく後半は自分のことを言っているのだろう。まぁ何を言われたとしても教える気などさらさらないが。ふいとシータから視線を外し、先程の酒をもう一口だけ飲む。すると話をはぐらかされたシータから不満の声が上がった。

「ちょっとちょっとゼフィさん！　ここは素直に教えようよ。職業とか、どこから来たとか、何の目的でここに来たとか！」

「じゃあ名前だけだ、ゼフィロス・エンリル。……これでいいよな？」

「それはこの前も聞いた！！」

さすがにそこら辺の子供と同じようにはいかないらしい。これはめんどくさい奴に絡まれたものだ。未だにしつこく聞こうとするシータにゼフィは何を思ったか、深紅の髪を掻きあげると先程の表情とは打って変わって、柔らかい笑みを作った。

「しょうがねぇ奴だなお前も。……じゃあいいこと教えてやる」

ふぅと溜め息をついたゼフィにシータは、内心ガッツポーズをする。今まで何一つ教えてくれなかった男がついに折れたのだ。今まで粘った甲斐があるというもの。目を輝かして今か今かとゼフィの言葉を待っているシータに、当の本人は声を押し殺して笑っていた。

「……ゼフィさん？」

「後ろ、見てみろよ？」

シータがおかしいと感じた頃にはもう既に遅かった。背後に感じる巨大な気配、そして自分を貫かんとする鋭い殺気。身に覚えのあるそれにシータの小さい体は震えあがった。

「おやか――」

虚しくも最後まで言葉が紡がれることはなかった。シータが言葉を言い終える前に、その頭上に激しい雷が落とされたのだ。　悲鳴は出なかった。その代わり痛みを堪えて、激しく悶え苦しむシータが床を転がりまわっていた。
それを見下す大男。長身のゼフィさえ見上げなければならないほどの大男だ。例えるならそう、岩山だ。筋骨隆々のこの大男はこの酒屋の主、ゴーシュ・クレジス。息子にさえ容赦しない愛の鉄拳はこの酒屋の名物でもある。あんな拳で殴られたらたまったものではな

いが、少し煩いシータを黙らすのにこれ以上のものはない。

「こぉんのクソガキがぁあ！！　仕事サボって客とお喋りかぁ？言い御身分だなオイ！」

厳つい顔に似合った乱暴な口調で、未だに悶絶しているシータに鋭い視線を送る。こんなに大声で怒鳴り散らしているのにも関わらず、店内の賑わいは先程と少しも変わらない。この二人のやり取りが今更のものではないということがよくわかる。

「うっはぁぁ……、何ですぐ殴るかなぁ。親方みたいに馬鹿になったらどうするんだよぅ……」

「あ〝あん！？」

口は災いのもととはよく言ったものだ。シータの頭に二回目の雷が落ちたのはいうまでもない。

ごつごつした岩、もとい拳を撫でながら、ゴーシュは床にのたうち回るシータからゼフィへと視線を移す。

「おおぅ、うちの馬鹿のせいで迷惑かけたなお客さん。ま、代わりと言っちゃなんだが酒代はまけといてやるよ」

「……そりゃどーも」

気風のいい男なのか、そうなのかよくわからないが、とりあえず好意は受け取っておこう。酒自体そんなに飲んではいないが、どうもここにいると邪魔が入りそうだ。そうとなればこんなところ長居は無用だ。

キィと耳障りな音を響かして、椅子から立ち上がると、テーブルに置きっぱなしにしておいた新聞紙を無造作にコートのポッケに突っ込む。するとふいに視線を感じた。視線を追えばゴーシュがこちらを怪訝そうに見ているではないか。何だと思いつつ、こちらも視線を返せば、ゴーシュは何か思い出したように伸びきった無精髭を擦った。

「【赤い満月】の話といやぁ、ここ最近有名だよなぁ。なんでも赤い満月の日にゃ、人が消えるんだっけな？　神隠しみたいにいきなり、跡形もなく。――そして新月の晩に姿を現す」

――死体として。

ゴーシュもそれを知っているのか、口には出さなかった。どうやらただの酒屋の店主ではなさそうだ。情報屋か何かをやっているのだろうか。そうすればシータの行動も説明がつく。親の背中を見て子は育つとよく言うものだ。

「……アンタがどこまで知ってんのか知らねぇけど、あんましこの話に突っ込まない方がいいと思うぜ」

「ん？　心配してくれてんのかい？」

「……警告してんだ」

そう言うとゼフィはゴーシュに背を向け、酒屋を出て行った。騒がしいはずの店内だが、やけに扉を閉めた鈴の音が響いた気がした。

「……どう思うよ、シータ」

ゴーシュが問うように下に視線を送れば、先までのたうち回っていたシータが何事もなかったように体を起こした。

「んー、なんか今までのお客さんとは違う感じがする……。雰囲気っていうか、なんていうか、殺し屋とか解体屋とか血生臭いことをやっているようには見えないけど……。親方は？」

「んん、確かに手を血で染めてるようには見えねぇが……。どうにも引っかかる兄ちゃんだぜ。しかしやけに綺麗な男だな。髪長ぇ三編みだしよ。最初どこぞの別嬪さんかと思ったぜ」

「……それ本人に言ったら多分半殺しにされると思うよ」

違いねぇと豪快に笑うゴーシュを尻目に、シータはゼフィが出て行った扉に視線をやった。裏世界に位置するここブラックストリートでは見ない独特の雰囲気を持った青年に、少なからずシータは興味を持っていた。しかもその青年は今、世間が大きく取り上げている【赤い満月】のことについて何か知っているようだ。これは気になる。気になってしょうがない。シータの中に燻っている好奇心という火種に火が点いた瞬間だった。

「あ、いいこと思いついた！」

シータが子供らしい無邪気な笑みを作ったことを、店内の客はおろか、ゴーシュさえも知ることはなかった。

＊＊＊

「……寒いな」

吐いた息が途端に白くなる。店から出たのはいいが、まだ寒さが残る季節。それに加えて今は真夜中なのだ。昼夜が逆転したこの裏世界では夜中こそが活動時間。ゼフィもどちらかといえば夜型の人間だ。ただこの身を突き刺すような寒さには未だに慣れなかった。こんなことならもっと酒を飲んで体を温めておくんだったと、今更になって後悔する。

だがこの寒さのおかげで空気はとても澄んでいる。ここが裏世界で、ゴミの溜り場と呼ばれているのにも関わらず、この静まった空気が、空間がゼフィは好きだった。空を見上げれば暗闇に瞬く幾億の星屑が。そして――、

（そういえば今日は満月だったっけ……）

暗闇を照らしだす黄金に輝く丸い月。神秘的でどこか魅惑的な美しさを持っているが、どうしてもゼフィは月を好きになれなかった。【赤い満月】のせいだけではない。どんな暗闇でも明るく照らす月光、それはどんな絶望下であっても人々を導く希望の光に見えてしまって、自分とは偉く対照的な存在だと思い知らされるからだ。自分も所詮裏の人間。光り輝く太陽になれなければ、闇を照らす月にすらなれない。ただ闇に染まり、闇に生きる者。ただそれだけのはずなのにそう思うことが最近痛いと感じている自分がいた。――滑稽な話だ。闇でしか生きられない存在なのに。

「あっ、ゼフィさん見ーつけたっ！」

ゼフィの心とは対照的な明るい声が空気を揺らして辺りに響いた。

「げっ！？　またお前かよ」

こちらに向かってとことこと歩いてくる癖毛のブロンドヘア。さっきまで床にへばっていた奴とは思えないほど、快活な表情を見せている。

「えっ！？　反応酷い！！」

「いや、当たり前だろ。ったく、外まで付いてくんなよな……」

わざとらしいほど長く深い溜め息を吐くゼフィに、シータは得意の営業スマイルを向ける。

「まぁまぁ、そんなに蔑ろにしないでよ。せっかくいいこと教えてあげようと思ったのに～」

「結構。どうせろくなことじゃなさそうだしな。ガキは家に帰って寝てな」

「残念、僕らの活動時間は今なんです～だ！」

「……」

そうだ、そうだった。ここは昼夜が逆転した町。さっき自分でも思っていたことだったはずなのに、こんな子供に揚げ足を取られるとは……。

「なんだよお前、俺をからかいにきたのか？　それともまた情報収集かよ？　お前に教えることは何も……」

「赤い満月」

ゼフィの言葉を遮り、シータははっきりとした口調でそう言った。
【赤い満月】その一言でゼフィの表情はさっきまでとは違い、険しいものに変わっていく。

「……そういえばお前、それ知ってるとか言ってたよな。新聞でも読んでいるのか？」

いや、新聞というより誰かの話を盗み聞きしたほうがこの町では早い。いろんな情報が飛び交うあの酒屋でのことだ。子供だと思って舐めていたが、このシータとかいう子供の情報収集能力はなかなか侮れないのかもしれない。

「まぁ、それもあるけど。実際見たことがあるんだよね。赤い満月」

「は？」

「いやだから、見たことあるの赤い月。しかもここ最近で」

ゼフィの顔が信じられないという表情で固まっている。この子供は自分をからかってるのではないかとさえ思えてくる。しかし、嘘をつくメリットがシータにあるのだろうか。確かにこの情報は、ゼフィが食いつくだろうとわかっていたのかも知れないが、問題はこの先。取って付けた様な嘘はぼろが出て見破られてしまう。このずる賢そうな子供がそんなへまするようにも見えないが。
ゼフィは、蒼い瞳を細めてシータを睨みつける。大抵の子供ならこれですぐ泣いて謝るというものだが、シータの反応は違った。

「あれは一カ月ぐらい前だったかな……」

徐にシータは話し始める。
自分が見た【赤い満月】のことについて。

＊＊＊

その日はゴーシュの手伝いで町はずれにある小さくて古びた家、ゴーシュの友人のエーデルに配達をすることになっていた。足を悪くしたエーデルのためにわざわざ用意した見舞いの酒は、小柄なシータが運ぶのに苦労するほどの大瓶だった。本来なら一人でこんなもの運ばない。いつもならエーデルの一人娘、マリーが来て一緒に手伝ってくれていたはずなのだが、その肝心なマリーは最近シータの前に姿を現さない。……嫌われることはやっていないはず。いつもシータは、マリーの前では男らしく、かっこよく振舞おうと努力していた。好きな子の前での精一杯の強がりだ。マリーに嫌われることは何一つやっていない。……多分。

「半月に一回は会ってたんだけどな……。エーデルさんの看病に忙しいのかなぁ。それともマリー自身具合が……」

不安は大きく募る。確かにマリーは、突っついたら折れてしましそうなほどに華奢で、体もそんなに強くなかった。でも弱音の一つも吐かず、母親の代行としていつも父親のエーデルを支えてきたのだ。そのせいで疲れが溜まって倒れてしまったのだろうか。だとしたら大変だ、あの家には二人しかいないのに。

シータは徐々に速足になっていく。もちろん大瓶は重い。下手してら転んでしまうから、細心の注意を払ってマリーの家まで急ぐ。そんな時ふと気付いた。いやそれ自体おかしい、こんなにもいつも

と“違う”のになぜ今まで気付けなかったんだろうか。

「月が、赤い……」

今日は確か満月の日だ。でも月というのは黄金に輝き、夜道を照らしだしてくれる。こんな赤い月なんて今までにみたことがない。妖しく光る不気味な色。まるで悪魔が誘惑しているようだ。甘美で、闇に満ちた恐ろしい地獄へと。

シータの小さい背中がぶるりと震える。何か見てはいけないものを見てしまったと。背中を這う悪寒を感じつつも、シータは足早にマリーの家を目指す。そんなシータを、ただ静かに赤い月だけが見ていた。

「……こんばんわ～。エーデルさん、親方から酒預かってきたよ～。具合はどう？　足は良くなってきたの～？」

シータのわざとらしく出した明るい声は、辺りの闇と静寂に呑みこまれた。

――おかしい。おかしい、おかしすぎる。シータの背を這いずりまわる恐怖は、はち切れんばかりに大きく膨らんできた。今の時間帯は深夜二時過ぎ。たとえ表の住人は寝ている時間だとしても、裏社会の自分たちにとっては活動時間だ。なのになぜ明かりが点いてないのだろう。……寝ている？　まさか。いくらなんでも治安が悪いこの町で鍵を開けたまま寝る奴なんていない。あのマリーがそんなへまするなんて考えられない。だとしたらなぜ？

「ねぇ～、マリーいるんでしょー！！　エーデルさんもー！！　二人とも僕を驚かそうとしたって無駄だよ。返事しないならこのまま入っちゃうからね～」

いくら大声で叫んでもなにも返ってこない。シータの声は木霊することもなく、闇に溶けてゆく。……やっぱり変だ。いや異常だ。今更になって手足が震えてくる。だって、いや、ここに訪れる前からおかしすぎる。だって――。

「音が、しない……」

この家は中心から離れているから人の笑い声は届かないだろう。でもそんなことが問題ではない。風の音も、自分の足音さえもしない。もしかしたら自分の声も。あれはもしかしたら心で考えていただけだったのか。いやそんなはずはない、はず。

「ねぇ！！　ねぇってばっ！！　二人とも悪趣味すぎるよ！　さ、酒瓶ここに置いておくからねっ！？」

はたして今の自分の声はちゃんと“音”となっていたのだろうか。それを確かめる術などない。

「ふ……ひ…ぃ、も、帰るから、ね……」

声が震える。シータ自身気付いているかわからないが、その大きい両目には涙の膜が張っていた。頬を伝って落ちる雫の温かさだけがせめてもの救いだ。それがなかったら今自分がちゃんとこの場所にいるのか、生きているのかさえわからなかっただろうから。

重い酒瓶を置いたはずなのに、その重量を知らせる音は一切しなかった。それでもうシータの恐怖心が一気に爆発したのだ。

「うわぁぁあぁぁあ！！　も、馬鹿ー！！」

それからは何も考えず、一目散で家に帰った。途中、怖くて振り向くことすらできなかった。だって、未だにあの赤い満月が不気味に光り、自分を照らしているのだから。

「と、いうわけで～。まぁ、よくよく考えてみたら、その日はちょっとお酒を舐めてたし。酔っ払った僕の勘違いかなぁ。と思ってたり」

八重歯を出しながら笑うシータ。しかしその表情は先程とは違い、あきらかに曇っていた。恐らく自分の“勘違い”で済ませたいのだろう。

「それを誰かに言ったりしたのか？」

すかさずゼフィは質問をぶつける。その表情は真剣そのものだ。その気迫に押され、シータの顔から笑みが消える。

「い、言ったけど。でもみんな『そんなことありえない』っていうから。それに、その後親方と一緒にもう一度行ったけど、二人とも中にいなかったんだ。廃屋になってたんだよ！」

二人ともいない。廃屋。その二つを合わせれば、さしずめ夜逃げでもしたのか。いや、ここの場合は昼逃げと言った方が正しいのか。とりあえずひとつ言えること、それは『赤い満月の晩、二人の姿を確認できなかった』ということ。

「エーデルさんが足を悪くして働けなくなって、確かにお金がなかったとは思うけど……」

シータは言葉を詰まらせた。まるでその理由が腑に落ちないというように。

「でもマリーは！！　マリーなら何か一言言ってくれるはずなんだ！　絶対に！」

だが、その絶対という自信は儚く破られた。ただシータの前には、幼馴染の女の子が前触れもなく消えたという事実しか残らない。

「……で？」

「えっ？」

「お前はその廃屋には入らなかったのか？」

唐突にされた質問は、今まで話していた内容とは違うもの。シータは一瞬何のことだかわからず閉口してしまった。

「……家には入らなかったよ。さすがに」

怖かったし、と表情がそう告げているように見えた。

それを聞いて、ゼフィは安堵したかのように息を吐いた。

「入らなくてよかったな……」

「ゼフィさん？」

ゼフィの性格からして『このチキン野郎』と罵倒されるものだと思っていたシータは、ただ大きい目を更に丸くしてゼフィを見ることしか出来なかった。

「行くぞシータ」

「……は？　どこに？」

深紅の髪を揺らし、蒼眼がシータを捕らえた。

「そのエーデルっていう奴の家に。もしかしたらまだいるかもしれない……！」

「何が？」

あの家は既に廃屋だ。物音一つすらしなかったのだ。今更何がいるというのだろうか。

「マリーとエーデルのどちらかが。それと、……犯人がまだいるはずだ」

「……え？」

ゼフィの言葉の意味がわからない。犯人？　まだいる？　何を言っているのだろうか？

「とりあえずさっさと案内しろって言ってんだよこの馬鹿！！」

質問すらすることを許されず、ゼフィは蒼眼を細めてシータを睨みつける。その目はどこか焦りが浮かんでるようにも見えた。

ゴーシュの酒屋から町はずれのエーデルの家まではそれなりに距離がある。大きい影と小さい影が月明かりに照らされ、今まさにそ

の道を全力疾走しているところだ。

「……あのなぁ、お前が先行かなきゃ道わかんないだろうが」

「……は、ぁ、だ……って、走るの速くて、僕もう無理……。少し休みたい……」

ゼフィのスピードについていけなくなったシータは、のろのろとした走りになり、やがて地べたに座り込んでしまった。肩を上下させ必死に酸素を補おうとしている。それに比べてゼフィはというと、顔色どころか汗の一つすらかいていない。しかたなくゼフィも歩みを止め、シータの回復を待つ。

「だいたいいきなりなんなのさ……！　犯人って、まだいるって……っ！　ちゃんと説明してくんなきゃわかんないよ！！」

シータの言うことはもっともだ。ゼフィは何か思い出したように口を開いた。

「……あー、悪い。説明してなかったな」

「今更ぁ！？」

ゼフィの言葉にシータは愕然とする。今まで自分は何の目的でここまで走ったというのか。不満の一つや二つ言いたかったが、今は呼吸が苦しくてそれどころじゃない。

「赤い満月の日には人が消える。それは知ってるよな？」

近くにあった岩にゼフィは腰かけると、ゆっくりと確認でもするか

のように話し始めた。シータがそれに黙って頷くと、ゼフィは話を続ける。

「今回のもそれだ。エーデル父子は雲隠れしたんじゃない。“贄”にされたんだ」

「に、え……？」

『贄』どこか恐ろしい響きがする言葉をゼフィはさらりと言った。

「贄ってのは、奴らにとっては餌のことだ。赤い満月の晩、贄に選ばれたものは魂を喰われる。そして新月の晩に……、死体として戻ってくる」

これは確か先程、ゼフィとゴーシュが話していた内容だ。ただ少し気になる点がある。

「餌って？　喰われるって、何？」

どこか現実味が帯びない話にシータの頭はついていけない。シータ自身、いきなりこんな話をされて戸惑いが隠せないようだ。

「……お前、霊の存在を信じるか？」

「……はい？」

またしてもいきなり話が飛んだようだ。それも限りなく遠い方へと。だがゼフィはいたって真面目な表情だ。

「いや、僕は目で見たものしか信じない……」

大きい目をぱちくりとさせてシータは真面目に答える。そんなシータの答えにゼフィは軽く息を吐き、苦笑してみせた。

「まぁ、当たり前の反応だよな。だけど実際“いる”んだ」

“いる”。何が、とはさすがに言えない。話の流れだとゼフィは霊が存在すると言っているのだ。まさかこんなときにオカルト話をされると思っていなかったシータは、数度瞬きを繰り返し、そして静まった空間に怒声を響かした。

「こ、こんなときに何言ってんだよゼフィさん！！　おばけなんかいるわけないじゃんっ！　だいたい今それが何だって言うのさ！！」

あまりにも現実味がない話を真剣にされて、呆れた様な、苛立つような複雑な気持ちがシータを襲う。だがそんなシータを気にすることなく、ゼフィは淡々とした口調で語る。

「なら示した方が早いな。霊に憑かれた者は、何らかの異常を体にきたす。例えば――」

ゼフィは自分の足を指で軽く小突く。

「健康だった人間の足がいきなり悪くなって歩けなくなったり、とかな？」

「……え？」

ぴしり、と全身が凍ったかのようにシータの思考は停止した。『いきなり足が悪くなる』その症状にぴったり当てはまった人がいるからだ。

「……エーデルさん。まさか、霊に取り憑かれてたって言いたいの？」

「そうすればつじつまが合う」

静かに、だが確かな確信を持ってゼフィはそう答えた。

いきなり足が悪くなったエーデル。霊。消えた二人。――赤い満月。

“贄”

「じゃ、じゃあ……、エーデルさんはどうなったの……？」

シータの声が震える。想像したくない悪夢が脳裏に散らついて離れない。

「……赤い満月は入り口、そして新月の晩は出口って教えてもらったことがある。一か月前の出来事だとしたら、新月はとっくに向かえている。もうエーデルは……」

「嘘だっ！！　そんなの……っ、ありえないよ……」

シータの大きな瞳から涙が溢れ、重力に逆らえなくなったそれは、頬を伝って静かに地に落ちる。

「【赤い満月】の日に、ありえないことなんか何もない。どんな異

常なことだって平気で起こる。現に俺は――」

そこで何か思い出したようにゼフィは言葉を噤んだ。シータが不思議に思いゼフィを見たが、その表情は伺うことは出来なかった。正確にいえば、シータはゼフィをあまり見ていなかったのかもしれない。否、“あるもの”に目を奪われたのだ。あの日見た悪夢が、再びシータの瞳を赤く染めたからだ。

「あ、あ……あれ……っ。ゼフィさん、月が……っ！！」

なぜ、とまた疑問に思う。こんなにもいつもと違うというのに、なぜ気付けなかったのだろうか。闇夜を照らす金色が、不気味な赤に染まったというのになぜ気付かなかったのだろうか。

「ゼフィさんっ、【赤い満月】がまた……っ」

――赤い、紅い、月が。こちらを見て不気味に光っている。不気味に光るそれはまるで手招きをするかのように妖しく光る。もう二度と戻れぬ地獄へと、誘うかのように。

刹那、静まった空間を動く影が一つ。

シータがなんだと思い、辺りを見渡せば目の前にはゼフィが。そして頬に感じる痺れが熱を持ち始めたとき、殴られたのだと理解する。

「……えー！？　なんで今殴ったの！？　僕なんかした！！？」

シータの口から不満が飛び出したが、ゼフィはというとふんっと鼻を軽く鳴らしただけだった。

「馬鹿野郎。満月は入り口だっつっただろ！　見ろ、お前が見たから――」

ゼフィは辺りを見渡し、そして軽い溜め息を吐いた。

「……閉じ込められちまった」

「閉じ込められた……？」

シータも辺りを見渡す。特に変わったところはない。周辺にはもう家はなく、遠くにぽつりぽつりと明かりが見えるだけだ。近くに弱弱しく生える木も、深夜なので寝静まっている。何も変わっていない。強いて言えばシータの左頬の痛みと、赤い満月ぐらいだ。

「閉じ込められたって……、なにそれ？　意味わか――」

「何の音もしない……、お前が体験した状況と同じだと思わないのか？」

意味わからない、そう口から出かけた言葉はゼフィの言葉に遮られる。

「え？」

頭の上に疑問符が浮かんでいるだろうシータを見越して、ゼフィは両手を打ち合わせて音をたてようとした。――しかし乾いた音が響くであろうその行為から生まれる音はなかった。瞬間、シータは理解する。あの時の奇怪な現象と同じだと。

「で、でもゼフィさんの声するし、ちゃんと会話だってしてるじゃ

ないか！」

「そりゃあ二人して閉じ込められたんだからな。俺ら二人以外の声はなんにもしないだろう？」

耳を澄ます。いつも聞こえるはずの風の音も、木々のざわめきも、足音も、自分の呼吸音すらしない。鼓動も――。自分は生きてこの場所に立っているのだろうか？　そんな不安が込み上げてくる。瞬間、シータの額に軽い衝撃が。見ればゼフィは軽く笑って、指を突き立てていた。そうデコピンをされたのだ、こんなときに。いや、こんなときだからこそしてくれたのかもしれない。

「……僕たち、助かるのかな？」

シータの口から不安の言葉が漏れる。この異常な現実から抜け出せるのだろうか？　もしかしたら今度の【赤い満月】の失踪者は自分たちになるのではないか。不安に心が押しつぶされそうになったとき、同じ境遇のゼフィから信じられない言葉が出た。

「助けてやる」

「……ふぇ？」

「何かの縁だ。助けてやるよ二人とも。ま、その代わり足手まといにだけはなるなよ」

助ける、とゼフィは言った。その言葉がどれだけ強い意味を持っているのか、恐怖で満たされたシータの心が少しだけ楽になった。でも気になる点が一つ。

「二人って……？」

ゼフィの言い方じゃ、シータ以外にもう一人助けると言っているようだ。まさか自分で自分のことは言わないだろう。だとすれば誰なのか？　生きている人間がいるのだろうか、この狂った世界に。

「……お前、惚れた女のことぐらい覚えてろよ」

惚れた女、シータの脳裏に横切る亜麻色の髪を持った華奢な女の子。

「マリー、生きてるの……？」

「多分、な」

シータにとってそれは衝撃的な言葉だった。エーデルとともに消えただろうマリーが生きているというのだから。

「でも、そのっ！　死んだって……」

「多分エーデルはな。症状からして、憑かれてたのはエーデルの方だ。でも再びこの地に【赤い満月】が現れたってことは、次の贄を欲してるということだ。恐らくマリーか俺達を狙って、な」

贄。現実味のない言葉がシータを震え上がらせる。でも震えている場合ではない。マリーが生きている可能性があるなら、助けに行かなければならない。シータは拳をつくり、固く握りしめる。そして決心したかのように大きく息を吸い、それを言葉にする。

「行こうゼフィさん！　マリーを助けに！！」

それにゼフィは口角を釣り上げて笑った。

「はっ、ガキが一丁前に俺に指図すんな！」

こつんとシータは拳をぶつけられる。額に触れた拳は温かい。きっと大丈夫。そんな思いが心に宿ったとき、――異常はすぐそこにやってきた。

静まった空間、自分たち以外の声はしないはずの空間に、凛と響く透き通った音。どこか遠くから、まるで自分たちを誘っているかのように不規則に鳴り響く。

「ななな、何これ！？　鈴の音！？　いったいどこから……！？」

「……どうやら誘われてるらしいな。シータ、お前の道案内はもう必要ない。それでも一緒に行くか？」

蒼い瞳が最後の確認をするかのように淡い緑色の瞳を覗き込む。だがシータの答えは変わらない。

「惚れた女は死んでも守れってね。親方から言われてるんだよ！」

「上等っ！　泣きべそかくんじゃねーぞ？」

にかっと笑ってシータはゼフィに答える。きっとシータ一人だったなら、泣きべそをかいて小さく蹲るしか出来なかっただろう。永遠に来ない朝を持ち続けるしか出来なかっただろう。だが今は一人じゃない。あのときと同様、恐怖心は消えていないが、それでも逃げ出さない覚悟だけはある。同じ失敗は二度も繰り返さない。

＊＊＊

ようやく歩きだした二人に合わせるように、鈴の音も一定のリズムを保ちながら遠くで鳴る。暗闇を照らす赤い光のなか、静かに響く鈴の音はどこか儚くて不気味だ。遠くで響いているにも関わらず、まるで脳内に直に響いている錯覚に陥る。無意識にシータはゼフィのトレンチコートのすそを掴む。だがゼフィはなにも言わなかった。ゼフィ自身黒いコートを着ているためか、見失ったら最後わからなくなってしまう。強いことは言ってもシータはまだ子供。一人ではやはり不安なのだろう。

「どうやら着いたみたいだな」

リン、と最後の音を響かせるとそれ以降鈴の音が聞こえることはなかった。二人は歩みを止め、目の前の小さな建物を見る。建てられてだいぶ経っているのだろう。壁には幾つもの亀裂が入り、蔦が着生していた。窓ガラスはひびが入っており、中の様子をうかがうことはできない。

「前来たとき、こんな風じゃなかったのに……」

どうして？　とシータの目は訴えていた。

そのとき、きぃっと鈍い音を立て、ひとりでに扉が開く。その扉の先に見えるのは漆黒の闇だ。そしてその中から、また二人を誘うかのように鈴の音が鈍く木霊した。

「……シータ、この先は霊の境界だ。下手に踏み込んだら二度と出られない。【赤い満月】の結界より遥かに強力なんだ」

淡々とゼフィはエーデル宅を見ながら説明する。あのときシータが

一歩でも家の中に入っていたら、今頃贄にされていたのはシータだったかもしれない。シータは大丈夫、と小さく言うとゼフィのコートを強く握りしめた。

「俺から絶対に離れんじゃねぇぞ」

そう言って二人は闇へと、地獄の道に足を踏み入れた。二人が漆黒の闇に完全に呑まれたとき、開いていた扉は音もなく、勢いよく閉まった。

「わわっ、真っ暗で何も見えないよ……！」

辺り一面黒に閉ざされた世界。赤い月の光さえ届かない漆黒の闇。これがゼフィの言っていた霊の境界。心なしか酷く肌寒い。恐怖を紛らわせるため、シータはわざと明るい声でゼフィに喋りかける。

「し、しっかしあれだね！？　こう真っ暗だと何にも見えなくて、ぶつかりそうだねぇ？」

そう言った瞬間、シータの足元で何かが動く。

「ぴぎゃーッ！！！」

シータは首を絞められたような奇声を発し、目の前にいるだろうゼフィのコートを思い切り引っ張る。

「だーっ！　いちいちうるさい！！　たかが鼠だろ。そんくらいでびびんな！！」

少し上から聞こえる怒声。ゼフィがちゃんと前にいるという安堵と、

びびるのはしょうがなくない？　という不満がシータの中で生まれる。

「……っていうか、見えるのゼフィさん？　こんな真っ暗なのに」

自分の手すら見えないほどの闇なのにも関わらず、ゼフィは確かに『鼠』と指摘した。口から出まかせ、というわけではないだろう。この状況で何も嘘をつく理由がないからだ。

「……まぁ、少しぐらいは。職業柄慣れてんだ。こういう状況には」

ぽつり、小さくゼフィは言う。その言葉はどこか寂しそうだった。

「ゼフィさん……？」

心配そうに言うシータにゼフィは舌打ちすると、苛立った声でこう言った。

「……今はどうでもいいだろ？　それより早くマリーを――」

――刹那、遠くで鳴っていた鈴の音がいきなり止み、そして、

『リンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンリンッ！！』

「――っ！！」

「ぷぎゃー！！？　何っ！？」

すぐそこ、耳の間横で大きく鈴が鳴り響いた。いや鳴ったというよ

り、直接脳内に響いたと言った方が正しいのかもしれない。何かを警告するようにけたたましく鳴った後、唐突にそれは止んだ。残ったのは今まで以上の静寂と、違和感。

「……シータ？」

痛々しいほどの静寂。何の音も、気配もしない。今まで自分の後ろにいた少年の気配は、……ない。

「おいっ、シータ！？　どこ行った！？」

暗闇にはゼフィの焦った声しか響かない。シータがいるならば何かしら反応を示す。大声で喚くなり、コートを引っ張るなり、何かしらは絶対するはずだ。なのにそれがない。

（空間を分断された……？）

見える範囲が少ない暗闇に目を凝らしても、シータの気配は微塵もない。

霊の境界は、いわば霊が自分の支配下に置いている空間のことだ。この世とあの世の境目。似ているようで全く異なるもうひとつの世界。その世界の主たる霊は、中に迷い込んだ哀れな贄を捕食することも、壊れるまで遊ぶこともできる。ここは霊の支配下だ。

――だから空間を分断、贄を別々の場所に分けるぐらいわけはない。ゼフィ自身十分にそれは分かっているはずだ。だが鈴の音に気を取られてこのありさまだ。――情けない。唇を固く噛みしめ、ゼフィは声を張り上げる。

「……っの馬鹿！！　手間かけさせやがってっ！！」

張り上げた怒声は闇に呑まれ消える。ゼフィはきしむ床を構わず走り、奥へ奥へと進んでいく。
だからゼフィは気付いていない。後ろで自分をじぃっと見ている赤く光る存在を。その光は笑うかのように弧を描いて歪むと、ぴちゃという水音をたてながら、ゆっくり、だが確実にゼフィの進んだ方向に向かって消えていった。

＊＊＊

「うぅ～、ゼフィさ～ん……。どこ行ったの馬鹿ー！！」

一方ゼフィと分断されたシータ。ゼフィと一緒だからこそ歩けた道は、今や暗闇。下手に動けば自分を探しに来たゼフィを迷わせるかもしれない。この現状から言って、シータは完全に身動きがとれなくなったと言っていい。一人にされて湧きでるのは、不安と恐怖。先程の鈴の音のような奇怪な現象、あるいはそれ以上のことが起きたらシータでは為す術もない。黙って霊の贄となるのを待つばかり。

「……マリー」

ふと思い出すのは、亜麻色の髪を持つ少女の姿。最後に見たのはいつだったか。もう一カ月以上も前になる。あのときはこんなことになるなんて夢にも思わなかっただろう。マリーははたして無事なのだろうか？　もう一カ月経っている。飲まず食わずでいたら、……まず生きてはいないだろう。

『……シータ……』

「えっ？」

最悪の想像をしてしまったとき、ふと聞き覚えのある声がした。柔らかく、透き通るような小さな声。間違えるはずがない、その声の持ち主を。

「マリー、いるの？」

辺りは暗闇。声の主の正体はわからない。だが確信はあった。マリーだという確信が。シータも小さく返事をすると、再び小さな声が聞こえた。

『こっち……。…早く……来て……。見つからないうちに……、早く……』

「待って、マリー！！　すぐ行くからっ！」

声はどんどん掠れて小さくなっていく。シータは声だけを頼りにゆっくりと歩き、闇へと溶け込んでいった。

＊＊＊

目の前にある古臭い木の扉を開けるのではなく、蹴り飛ばす。いちいち開けるなんて面倒なことはしない。邪魔なものは排除する。それが彼の、ゼフィのルールだ。ただしこの空間だけの話。もう何個目の部屋の扉を蹴破っているのだろうか。一向に当たりはこない。焦りだけが増して判断力を鈍らせる。

「いったいどんだけ広いんだよこの空間……！　早くしねぇと……

っ！」

歯を強く噛みしめる。もっと自分が注意していればこんなことにはならなかったはずだ。シータに何かあったら取り返しがつかなくなる。こんなときに焦っていてはいけないのだ。もっと冷静に、絶対に何かしら方法はあるはず。

（……落ち着け…ッ！　冷静になれ。解決策はあるはずだ……！）

すぅと深呼吸をし、目を閉じる。四肢の力を抜き、神経を集中させる。

研ぎ澄まされる神経。暗闇の音のない世界でゼフィは聞いた。いや、感じ取ったと言うべきか。脳裏に直に響く微かな声。

『……死ぬのが怖い』

何も見えない、何も聞こえない。ただ絶対的な“死”。死の足音が自分に近づいてくる恐怖。

こんなところで死にたくないという声がゼフィの脳内に谺する。

だがそこでいきなり声は途切れる。

そして別の声がした。

『道連レガ欲シイ……』

「――――！！」

背後で声がした。この世のものとは思えない、地を這うように低く

憎しみの籠った声。機械的に言われた台詞に思わず背筋が凍りつく。瞬間、べちゃりと何かが崩れ落ちる音がして、反射的にゼフィはその場を飛び退く。

そこで見たもの、いやあったものは、人の形をした肉の塊だった。所々腐食しており、原形を留めていない。ただこの場でこのような姿になっているのは誰なのか、ゼフィには想像がつく。

「やっぱり憑かれてたか。死んで尚も肉体に寄生し続けるなんて趣味悪ぃな！」

瞬間、強烈に鼻につく腐臭。おもわず顔を顰めるゼフィに再び“何か”が襲いかかる。

『欲シイ欲シイ欲シイ！！　お前ノ“ソレ”欲シイ！！　クレクレクレ、……寄コセッ！！！」

暗闇に浮かびあがるいくつもの赤い点。泡のようにぶくぶくと音をたて、膨張を繰り返す様子はまるで、獲物を捕食する動きに見える。

「はっ、あげねぇよっ！！　“これ”は俺のものだ！！」

ゼフィは口角を上げ、ニヤリと笑うとゆっくり目を閉じる。そして開けた次の瞬間、

「断罪の時間だ。――かかってこい化け物！」

ふわりと、ゼフィの瞳が赤く染まった。

＊＊＊

「マリー、マリー？　どこにいるの？」

覚束ない足取りで歩くシータ。両手を突き出し何とか壁を伝うものの、やはり視覚が使えない分歩くスピードは遅い。だんだんとマリーの声が薄れて聞こえなくなってしまう。せっかく会えたのに。やっと会えたというのに、こんなところで見失ってしまっては意味がない。

シータは意を決して、壁から手を離し己の感覚のみで、走った。

「……って、うわっ！？」

案の定、すぐにバランスを崩し転ける。暗闇で無闇に走るのはやはり無謀だったか。床に前のめりになり、なんとか痛みを堪え、シータは立ち上がろうとする。

が、次の瞬間。平行であるはずの床がぐにゃりと歪み、視界が反転する。何が起きたのか理解する前に、シータは床に足を取られる。

「あ、足が……！！」

もがけばもがくほど足は床に埋まっていく。まるで底なし沼に嵌ったかのようだ。文字通り、地獄に落ちるような錯覚に陥る。ずぷりずぷり、と床は無慈悲にシータを喰らい、やがてシータは完全に床に呑まれ姿を消した。

どこか遠くで鈴の音と何かの鳴き声が聞こえた気がするが、それは誰の耳にも入っていない。

＊＊＊

無数の赤い点が捕食するようにゼフィを襲う。それを既の所でかわし、ゼフィは見定めるように赤い点を、その赤く染まった瞳で見つめる。
鮮血のように染まった瞳は、まるで肉食獣を髣髴とさせるかのように瞳孔が縦に細長くなっていた。

「なるほどな……」

その瞳を細め、ゼフィはぽつりと一言呟く。そして何を思ったか、瞳を閉じてその場に立ち竦む。
それを見て赤い点はぐにゃりと笑ったかのように歪んだ。

『　死　ネ　』

憎悪を含んだ呪いの言葉を発すると、赤い点はゼフィの周りを取り囲み逃げ道を塞ぐ。それでもゼフィは逃げるどころか、目すら開けない。赤い点が収縮膨張を繰り返しながら、ゼフィの体に触れようとした次の瞬間、

『キィィィィ！！！』

弾かれたかのように赤い点はゼフィから飛び退く。だがそれは叶わなかった。無数に現れた“黒い点”が、赤い点を拘束する。

「残念だったな」

「ギィィィイ！！？」

ゼフィは口元を歪めて軽く笑う。再び開いた瞳の色はやはり血のように赤い。

「悪いがここで、消えてもらう」

そう言った瞬間、ゼフィの右腕全体に“黒い”点が無数に集まった。その黒い点は収縮膨張を繰り返しながら、何かに“形”を変えようとしている。

黒い点が長細く伸び、禍々しくも美しい三日月が姿を現す。黒い点は、鋭利な大鎌へと姿を変えていた。「消えろ」

無慈悲に冷酷に、死神が神判を行う。

大鎌の切っ先が赤い点を切り裂こうとしたその時、

チリン、とどこからか鈴の音が聞こえた。

それが聞こえたと同時に赤い点は霧のように拡散し、その場から姿を消す。

残ったのはゼフィ一人だけ。

（……逃げられたか）

だが、たとえどこに逃げようとこの空間の中にはいることは間違いない。贄を喰らわないうちはまだこの空間は消えない。――だとすれば、

「ちっ、シータのとこに行ったのか」

軽い舌打ちとともに感じたのは軽い焦り。

あの子供は今頃どこで何をしているのか。シータは霊と戦う術を知らないというのに、取り憑かれたら厄介なことになる。

「しょうがねぇなぁ……」

溜め息とともに右手の大鎌を構える。そして――。

＊＊＊

「はっ！？」

シータの意識が覚醒する。なぜなら自分の頬を突く感触と自分を呼ぶ声がしたからだ。

「あ、起きた」

ふいに聞こえる懐かしい声。透き通るようなソプラノボイス。亜麻色の髪を持つ少女は、琥珀色の目を丸くさせ、にこりと笑った。

「マリーっ！！」

会えた喜びからか、感極まってマリーに抱きつこうとするシータだが、それをマリーは軽く止める。

「シータ……。私を探しに来てくれたの……？」

か細く発せられたその問いに、シータは力強く頷く。すると、マリーの丸く大きな瞳から涙が零れ落ちた。

「シータ、シータァ……！　ありがとう……っ！　ごめんね……」

大きな瞳から零れる大粒の涙。しかしその表情は月明かりの逆光でシータからはよく見えない。

……そう、今シータとマリーがいるこの空間だけは闇に閉ざされていないのだ。マリーの後ろにある大きな窓。そこからは赤い光が差し込んでいる。不気味な光だが、暗闇よりかは随分とましだと思えたのは、今は一人じゃないからだろうか。

「マリー、もう大丈夫だから。怪我とかしてない？　お腹すいてない？」

安否を確認する問いに、マリーは弱弱しく頭を縦に振る。そして悲痛な叫びがシータを襲った。

「パパがぁ……！！　私のせいでパパがぁっ！！」

マリーの泣きじゃくる顔にシータはふと、ゼフィの言葉を思い出す。

『もうエーデルは……』

あの言葉の続きは言わなくともわかっていた。エーデルは既に死んでいる。マリーの父親は死んでいるのだ。マリーの様子からして、マリー自身もそれをわかっている。だからこそマリーの泣き叫ぶ様は、シータの心を強く締め付けた。もっと早く探し出していたらエーデルも助けられた。だがシータにはそれをできる力がなかった。一人ではどうすることもできなかった。そう思うと、とても悔しい。マリーを元気づけなきゃいけないときに、肝心な言葉は出てこなかった。

「私のせいなの……」

「……マリー？」

マリーの声が沈んだ。俯いているため表情はわからないが、さっきよりも声に力がない。

「私のせいでパパが死んだの、呪われたの！！　パパが『うちでは面倒みれないから』っていうから、だからあの子を捨てるしかなかったのっ！　あの子はきっと私を怨んでる、憎んでる。殺したいほど憎んでる。だから私をここに閉じ込めた。どうしようどうしよう私も殺される。祟り殺される……っ！」

尋常ではないマリーの取り乱しように、シータはどうすることもできない。マリーはきっとこの異常現象を前に心がついていけなくなったのだ。

こういうときはどうすればいいのだろう。シータは考えた末に、手を伸ばしマリーを抱きしめようとした瞬間、

突如現れた無数の赤い点が、マリーを取り囲んだ。

「マリーっ！！！」

どこから現れたのか。何もない空間から湧き出るようにぶくぶくと音を鳴らしながら、それはマリーを呑みこんでいく。

そもそもなぜ音が聞こえるのだろうか。この赤い点は何なのか。――そんなこと考えている余裕など今のシータにはない。ただ目の前のマリーを助けようと手を伸ばした瞬間、その赤い点は拡散するように姿を消した。

「……マリー？」

いや、姿を消したんじゃない。

「――ねぇ、シータ。お腹すかない？」

ごぼっとマリーの口から赤い点がぶくりと音をたてながら溢れ出る。この時シータは理解した。消えたんじゃない、

マリーの中に入ったんだと。

「マ、マリー……？　大丈夫なの？」

「私ね、自分で獲れるようになったんだよ。ここにいる間、食べ物には困らなかったわ」

シータの問いには答えず、マリーは俯いたまま喋り始める。その声は淡々としていて感情が感じられない。

「何を、獲れるようになったの……？」

口から出た言葉は先を促すものだった。なぜこんなこと言ってしまったのか、だがもう遅い。マリーは含み笑いをしながら顔をシータに向ける。

「鼠」

「え？」

その瞬間、シータは今まで感じたことのない恐怖に全身を支配された。

マリーの目が赤い。瞳が血のように真っ赤に染まっていて、白目の部分は黒く染まっている。どうみても人間のものとは思えない。その目は本人の意思で動かしているのか、そうでないのか、辺りをギョロギョロと見渡している。左右別々の動きをする奇怪な目にシータは言葉が出ない。足から根が生えたかのようにその場から動くことが出来ない。――怖い。本能的な恐怖を感じ、脳内が『逃げろ』と警告音を鳴らす。

「でも鼠より美味しそうなものがあるの。――ねぇ、シータ」

縦に細長く伸びた瞳孔が真っ直ぐシータを捕らえた。

「私にあなたを、食べサセテ？」

マリーの腕がバキバキと音を立てながら歪に変形していく。そしてその奇怪な手がシータに振り下ろされそうになった瞬間、金縛りが解けたようにシータはその場から飛び退いた。

ガンッと頭に木霊する鈍い衝撃。壁に思い切り頭をぶつけたのだ。だがさっきまでいた床よりはましだ。ずたずたに切り裂かれている。鋭く伸びた爪を床から引き抜き、マリーはシータを捕らえる。いや、あれはマリーじゃない。マリーの形をした化け物。きっと霊に取り憑かれたのだ。

でもシータは、マリーを助ける術を知らない。

「ぐぅっ！？」

瞬間、腹にくる重い衝撃。背中に感じる強い痛み。気付いた時にはマリーに押し倒されて、逃げることは敵わなくなった。上にいるマリーの姿をした化け物は、裂けそうなぐらい口を広げて笑っている。その口から見える鋭く伸びた歯は、皮を喰い破り肉を引き千切りそ

うだ。赤く見える舌は、生き血を全て啜られそうなほどおぞましい。

――あぁ、これまでか。

シータは諦めたかのように目を閉じる。これから来るであろう激しい痛みに耐えようと必死に奥歯を噛み締める。まさかこんなところで死ぬなんて夢にも思わなかっただろう。また同じような明日が来ると信じていた。こんな非日常、誰が想像したか。最期にシータが思い浮かべたのは楽しかった酒屋のこと。こんなことならもっとゴーシュと話していればよかった。育ての親の彼に礼の一つでも言えばよかった。それと、――マリーに好きだって、言えばよかった。

「――やっぱりいやだっ！　僕は死にたくないっ！！」

残ったのは後悔ばかり。やはりこんなところで死にたくない。ばちっと勢いよく目を開けると、そこに映ったのは、今まさに、奇怪な腕が振り下ろされる瞬間だった。

キヒヒヒヒヒッ、と高く笑う悪魔の声。シータは咄嗟に目を閉じ、奥歯を噛み締める。

『ギャァァァァァ！！』

聞こえたのは、誰の悲鳴だったか。

機械的で低い化け物の声に混ざって、シータは聞き覚えのある声を聞いた。

「……だから言ったんだ。足手まといにはなるな、ってよ」

薄ら目を開けて飛び込んできたのは、深紅の長い三編み。黒いコー

トを着た青年が立っていた。

「ゼ、ゼフィさぁぁあん！！」

シータの瞳から大粒の涙が零れ、歓喜したように青年の、ゼフィの名を呼ぶ。それにゼフィは「うるさい」と短く返すと、シータから離れたマリーに視線を向ける。

「あー、あれがマリーだな。憑かれたのか。厄介だな……」

ゼフィは、軽い溜め息をつきながら呑気そうに頭をぽりぽりと掻く。そして戸惑うことなく、大鎌の切っ先をマリーへと向ける。

「な……ッ！？　ダメだよゼフィさん！！　あれはマリーなんだよ！？　殺さないでッ！！」

シータの悲痛な叫びが狭い部屋に谺する。その声は聞こえているはずなのに、ゼフィは何の返事もしなかった。ただ真っ直ぐにマリーを見つめ、大鎌を構える。

その姿は、そう。――死神。無慈悲で冷酷で、魂を刈り取るために存在する絶対の神。今のゼフィの姿が、シータにはそう見えた。だから、

「やめて、ゼフィさんっ！！」

床にへばり付いていたシータだったが、わずかな力を振り絞りゼフィの足元に絡みつく。ほんの一瞬、ゼフィは足元のシータに気を取られマリーから目を離した。

『クッ、ケケケケケケッ！！』

不気味な笑い声に気づいた時には遅かった。咄嗟にゼフィが振り下ろした大鎌は、虚しく空を切り、対象物を切り裂くことはなかった。
――マリーが消えたのだ。

「……っの馬鹿野郎！！　邪魔すんじゃねぇっ！！」

絡みつくシータに怒声を浴びせながらゼフィは睨みつける。その赤く染まった瞳で。

「ゼフィさん、目が……」

赤い、と言おうとしたのだろうが、その言葉がシータの口から発せられることはなかった。

それは突然のことだった。ゼフィがいきなりシータを蹴り飛ばしたと思った直後、赤い飛沫が上がるのをシータは確かに見た。鉄のような臭いを放つそれは、ゼフィの左腕から流れている。どくどくと流れ出る生の証が、ただ木の床を赤く染める。
それをただ不気味に笑いながら、自分の爪から滴る血を舐め取るマリー。ゼフィを切り裂いただあろうその爪は、長く、鋭く、歪に歪んでいた。

「――ッ！！」

言葉にならなかった。シータの小さな体は恐怖と罪悪感で震える。
あの時自分が止めていなかったら、ゼフィは怪我をしなかったはずだ、と。

「ゼフィさ……ん、ごめん、なさ――」

シータの声が震える。恐怖に罪悪感に、己の罪に。
ただそれをどうすることもできずに、シータはただ涙を流した。

「――シータ」

その時、諭すような声でゼフィはシータの名を呼んだ。

「ゼフィ、さん？」

震える声で返事を返すと、浅い呼吸を繰り返しながらも、ゼフィは笑ってくれていた。

「このくらい掠った程度だ、心配すんな。それよりも――」

切れ長の瞳をマリーの方に向けると、再びゼフィは大鎌を構える。
それに反応して、マリーはグルルと獣が威嚇するように喉を鳴らした。

「……だいぶ浸食されている。早く肉体から魂を分離しないとマリーは助からない」

「え……？」

一瞬ゼフィの言葉を疑ったシータだったが、ゼフィの表情と、マリーの状態を見て言葉を失った。
今まで化け物と化してしまったマリーをシータは直視できなかった。だがゼフィの言葉を聞いて、マリーを見ればその状態は一目了然。
マリーの肌は元々白かったが、今は不気味なほどに青白い。そし

てその肌を伝うように冷や汗も流れている。呼吸が苦しいのだろうか、よく見れば肩を激しく上下させ、必死に空気を取り込もうとしている。歪に奇形した腕は、所々分厚い皮が剥がれ落ち異臭を漂わしている。腐り始めていることがすぐにわかった。体も小刻みに震え、恐らく立っているのもやっとなんだろう。それでもマリーは、威嚇するように呻く。まるで瀕死の状態に追い込まれた獣のように。

「ゼフィさんっ！　マリーはどうなってるの！？」

「……肉体の拒絶反応、だ」

ゼフィが苦い顔で呟いた。瞬間、マリーの口から赤い血がどばっと溢れる。

「普通、生物には“一つの肉体に一つの魂”ってのが絶対の理なんだ。だが憑かれている状態だとその理は無視される。一つの肉体に複数の魂があっちゃいけねぇんだ」

だが今のマリーは理に反している。その結果、肉体は負荷に耐えきれなくなり限界を迎えるのだ。

「あと数分で、肉体は限界を迎えるだろうな。だからもう時間は限られている。――シータ」

赤い瞳がシータを捕らえる。だがその瞳に嫌悪感を感じることなく、シータはゼフィを見つめた。

「お前にしか出来ないことだ。一瞬でいい。マリーの意識を表面に出してくれさえすれば、後は俺がやる」

その時、シータはあの言葉を思い出した。

――助けてやる。

「――わかった。任せて」

あの時、シータは思った。この人なら、必ず何とかしてくれると。悪夢の夜から助け出してくれると。シータも決断したはずだ、マリーを必ず助けると。

「ゼフィさんの突破口は僕が開いてみせる！！」

「上等っ！　任せたぞシータ！」

ゼフィは右手に掴んだ大鎌に力を込める。するとそれに答えるように大鎌は青白く光ったような気がした。

マリーの意識を一瞬だけ戻せばいい。だがその方法がシータにはわからなかった。口では任せろと言ったが、正直今のマリーにシータの声が届くかなんてわからない。そう、やってみなければわからないことだ。

「マリーっ！！　僕だよ、シータだ！」

『グルルルルッ！！』

シータの呼び声にマリーは低く唸るだけ。声はまだ届いていない。

「そんな化け物に負けちゃダメだ！！　その体は君の体なんだ。負けないでマリーッ！！」

歪んだ腕がミシッと軋む。瀕死の状態で尚も攻撃態勢に入ろうとするマリーに対し、シータの瞳から涙が溢れた。

「ダメだよマリー……。それ以上動いたら死んじゃうよ……」

歯を剥き出しながら、マリーは獲物であろうシータに狙いを定める。赤と黒に歪んだ目からはどろりと血の涙が零れ落ちた。

声は、届かない。

「マリーッ！！」

だが、届かない声など存在しない。

＊＊＊

シータは唇を思い切り噛み締める。目も固く閉じる。そして信じられない行動に出た。

「うわぁぁぁぁぁあ！！」

マリーに向かって突進したのだ。その距離はほんの少しだが、不思議と時間がゆっくりと流れているような気がした。走っているのか、歩いているのか、シータにはわからなかったが、ただ一言、大声でその言葉を叫んだ。

「マリーッ！！　好きだぁぁぁぁぁあ！！！」

ゆっくりだった時間は動き出す。目を瞑っているシータには止まる、いや止まろうとしなかったのか、そのまま派手にマリーと激突した。両手でマリーを抱きしめるシータ。完全なる無防備の状態だ。この状態で止めを刺すのは簡単だ。しかし、マリーから攻撃を受けることはなかった。

「シー、……タ……？」

凛と、透き通るようなソプラノボイス。聞き覚えのある自分を呼ぶ声にシータは目を開ける。

そこには、琥珀色の目をした幼い少女が顔を赤くしてシータを見つめていた。

「今の、ほ…ん、とう……？」

「マリーッ！！」

声は掠れて弱弱しかったが、その声色は紛れもないマリーのものだった。だが、喜ぶのもつかの間、マリーは頭を抱えて苦しみだした。

「マリーッ！！」

「あ〝ぁあ……っ！　ダメ、にげ……、逃げてシータ……ァ」

瞬間、マリーの体から力が抜け、ごぼりと体から無数の赤い点が抜け出る。それは収縮膨張を繰り返し、二人の頭上で意思を持ったかのように蠢く。

そしてそれは、真っ直ぐにシータに向かって飛びかかった。

「――っ！！」

悲鳴すら出ない恐怖。意識のないマリーを守ろうと、シータは盾になるかのようにマリーを抱きしめた。

その時、風を切る音がした。

「バーカ、ガキの癖にカッコつけんなよ」

黒い大鎌の切っ先が赤い点を切り裂く。じゅわりと音をたてながら、赤い点はまるで蒸発するように跡形もなく消えていく。それはまさに死神が魂を狩る瞬間の光景だ。ただ無慈悲に冷酷に神判を下す。ただ判決は一つしかない。死神が下すのは、ただ絶対の“死”

そして結果として、今ここで一つの魂が跡形もなく消滅した。ただそれだけ。

最後、どこか儚く鈴の音が鳴ったのをゼフィは聞いた気がした。

＊＊＊

「……あれ？」

淡い緑色の瞳がぱちりと開く。そして起き上がる。

「僕は……？　いったい……？」

「よぅ、やっと起きたのか」

見渡せば古びた部屋。物があちこちに散らばっていて、床は酷い有

様だった。そして金色の月明かりに照らされ、こちらを見ているのはあの青年。

「ゼ、ゼフィさんっ！！」

「うるさい」

歓喜に満ちた声はゼフィの一言によって黙らされる。それでもシータは喋らずにはいられなかった。

「ゼフィさん！　僕たちどうなったの！？　……というよりここはいったい……？」

生活感のなくなった部屋、床には酒瓶や古びた雑誌、新聞が散らかっている。シータが新聞を拾い日付を見ると、一か月前のものであることがわかった。　一か月、ある予感がシータの脳裏を掠める。

「ここはまさか……、さっきの、マリーの家？」

シータの独り言にも似た問いに、ゼフィはただ空を見上げていただけだった。

空はいつもと同じ闇色だ。たださっきとは違う金色の満月が、闇の中でその輝きを放っている。――終わったのだ。悪夢が。そうシータが理解した時、今までの緊張が一気に解け、その場にへたり込んだ。

「なんだよ、だらしねぇな。さっきまでの威勢はどこいったんだ？」そんなことはお構いなしに憎まれ口をたたくゼフィに、シータは軽い怒りを覚え睨みつける。そのちょっとした怒りに気づいたゼフィがシータの方を振り向くと、その瞳の色は蒼かった。

「……なんだよ、じろじろ人の顔見やがって」

ゼフィの端正な顔が不快そうに歪んだ。意味なく見られたら不快にもなるだろう。それでもシータはゼフィの顔を見ながら、一つの疑問をぶつける。

「ゼフィさんって、いったい何者なの……？」

シータの問いに、ゼフィは言葉を選んでいるかのようにしばらく考えた後、口を開いた。

「俺は――」

その時、二人のすぐ後ろで小さく鈴の音が鳴った。

「――ッ！！」

シータは後ろを振り向けなかった、悪夢はまだ続いている、そう思ったから。だがシータと向かい合っているゼフィは、後ろの“何か”を見ている。それなのに特に表情は変わらなかった。寧ろそれが当たり前であるかのように、ただ冷静に“何か”を見ていた。

「ゼ、ゼフィさん……」

「後ろ見てみろよ」

「は！？」

「今回の事件の役者のお出ましだ。安心しろ、害はない」

「いやいやいや、何言ってんのっ！？　そんなの見れるわけないでしょ！！？」

だがそんなシータの思いはあっさり砕かれる。目の前のゼフィが手招きして、後ろの“何か”を呼んだからだ。

両手で頭を抱えるシータをよそに、“何か”は鈴を鳴らしながらシータの横を通り過ぎた。ピンと立った耳に、白い毛皮。しなやかな体と尻尾を揺らしながら、それはゼフィに擦り寄るように甘えた。その首元には、小さな鈴がついている。

その動物は短く「にゃー」と鳴いて、金色の瞳にシータを映した。

「ねねね、猫……？」

そう、シータの目に映ったのは紛れもない猫。それに答えるように猫はチリンと鈴を鳴らした。

「こいつはずっと俺達を見てたんだろうな。何せ道案内してくれるぐらいだ」

――道案内？　そう、考えられることは一つ。悪夢に囚われた際に鳴った鈴の音は、紛れもなくこの猫の仕業だったのだ。ただあの時は姿は見えなかった。なのになぜ今更になって現れたのか疑問が浮かぶ。

「死んでるんだ」

「え……？」

シータの考えを見抜いたかのように、ゼフィは一言そう言った。

「死んでるって……、ちゃんとここに――」

そうシータが口にした瞬間、白猫の体は透け始め、半透明になる。そして短く鳴きながら、ゼフィの手に擦り寄るように甘える。まるで最期がわかっているように、ぬくもりを求めて。

「あ……」

最期に白猫は短く鳴くと、ふわりとその体は白い点に変わり、空気に溶け込むように消えていった。それはまるで成仏でもしたかのように穏やかなものだった。

「……あの白猫は、母猫だったんだろうな。死んでも尚、自分の子供が墜ちていくのを見たくないからああして助けを呼んでたんだ」

チリン、と耳の奥に残っている鈴の音。それは必死に助けを呼んでいた母猫の叫びだった。自分の子供が悪霊となり、人に憑くのを見てられなかったのか。それとも母猫も子猫も呪縛に囚われていたのか、それは誰にもわからない。

ただそれでも、

「ちゃんと、成仏できたのかな？」

シータの言葉にゼフィは答えなかった。

そして黙ったまま、近くに横たわっていたマリーを抱えると扉を開け、奥へと消える。

「えっ！？　なんで置いていくの！！？　ちょっと待ってよゼフィさん～！！」

「知るか、さっさとしろ。帰るぞ」

屋敷を出ても尚、二人の他愛もないやりとりは続いた。
それをただ、金色に光る満月だけが見守っている。

## 始まりの刻

ゼフィとシータが酒屋を出て、まだ二時間も経っていない。現在時刻は深夜三時過ぎ。

あれから二人は酒屋に戻ると、店主ゴーシュが険しい顔で二人を交互に見た。当然だろう、ゼフィもシータも傷だらけ。ゼフィにいたって片腕が血に塗れているのだ。そして夜逃げをしたと思われていたマリーが意識を失って担がれている。さすがに店内の客も三人を見てざわついたが、ゴーシュは何も言わず店の奥に二人を案内した。

＊＊＊

案内された部屋は、柄にもなくちゃんと整頓されているゴーシュの部屋。ゴーシュはマリーを医者に見せるため少し席を外している。特に喋ることもなく、残された二人はただゴーシュの帰りを待つのみ。

「ゼフィさん、傷大丈夫なの？」

しばらくの沈黙の後、先に喋ったのはシータだった。性格上黙っていられないのだろう。ゼフィの痛々しい傷跡に目をやると心配した眼差しを向けた。

「傷？」

だが当の本人は、特に気にした様子もない。むしろシータの言葉に疑問符すら浮かべているほどだ。

「いやいや左腕の傷だよ！？　僕をかばってくれた時の傷！！　親

方と一緒に医者に行けばよかったのに……」

その言葉にやっと気付いたのかゼフィは、あぁと緩く反応した。

「別にこのくらい……、もう治ってるから」

「あっ、そうなん……って、えーっ！？　嘘でしょ！？」

シータの驚愕の混じった大声に、ゼフィは隠すことなく不快そうな顔をした。

「あれないありえないっ！！　腕が抉られたんでしょ！？　そんなの治るわけないじゃないか！」

シータの大声に溜め息を吐きつつ、ゼフィは答える。

「んなこと言われたって治るんだよ、俺はな」

「治るって……。そうだ、ゼフィさんって何者なの？」

シータは再びさっきと同じの問いをもう一度ゼフィにぶつけた。ゼフィは何者なのか。【赤い満月】のこと、霊のこと、そしてその霊を倒す術を知っているこの青年の正体は何なのだろうか。ゼフィは一瞬戸惑う素振りを見せたが、しばらくして口を開いた。

「……俺は【赤い満月】を調査するために派遣された王都の特殊部隊の一人だ。――ソウルイーター。そう呼ばれている」

「ソウルイーター？」

数度瞬きを繰り返して、シータはゼフィの言った言葉を繰り返した。

「ゼフィさんがそのソウルイーター？　だとして、傷の治り具合となにか関係あるの？」

シータの言葉にゼフィは軽く目を細めた。

「ソウルイーターは普通の人間じゃない。霊と契約してまで生きながらえている人間だ。霊の力を借りて戦ってる。だから、俺だってあいつらと同じ、化け物みたいなものなんだよ」

「化け物って……、またまたそんなこと言って～」

「霊に憑かれた人間は、瞳が赤くなる」

「え？」

その言葉を聞いてシータは固まった。思い当たる節があった、憑かれたマリーとゼフィの共通点。

――瞳が真っ赤に染まっていたことを。

「……ゼフィさん？」

「お前だって見たはずだ、俺の目が赤く染まっていたところを。それに俺は大鎌を持って――」

「ゼ、ゼフィさん！　少し落ち着いて！」

自棄になりかかっているゼフィを何とか宥めようとシータはゼフィに手を伸ばすが、その手は叩かれる。拒絶を示すかのように。

「――シータ」

ゼフィの声は低く、殺気立っていた。だが少しだけ震えていた気がした。黙っているシータにゼフィは、次の瞬間、信じられない言葉をかけた。

「なんてな」

「……は？」

「いや、だから嘘だよ嘘。お前があんま真剣そうに聞いてるもんだからちょっとからかっただけだ」

「は……、はぁー！？　何それ！？　人が真剣に聞いてたのに！どっからが嘘なの！？」

「最初から全部」

「はぁー！！？　ちょ、心配してすごい損したんだけど！？」

何の悪びれる様子もなく、舌を少し出しながらゼフィはシータを小馬鹿にした。当然シータは騙されたことに対して怒りを露にする。顔を真っ赤にして、今まさに飛びかからんとするシータに第三者の声がかかった。

「おいこら、うるせぇぞテメェら。店内に聞こえんだろうが」

キィと木で出来た古いドアが開かれると、立っていたのは岩のようなごつい大男。ゴーシュが不快そうに顔を歪めて部屋に入ってきた。

勢いよく締められたドアからは、ミシリと木が歪む何とも言えない音がたてられた。

「親方っ！！　マリーの具合は！？」

「キャンキャンうるせぇぞクソガキがっ！　マリーなら大丈夫だ、命には別状ねぇよ。――ただ」

そこでゴーシュは言葉を濁した。言うか言わないか迷っているようだったが、すぐさまその口は言葉を紡いだ。

「栄養失調が激しいな。一か月何食ってたのかは知らんが、体力がかなり落ちている。それに寝言がな、変なんだ」

「変って？」

ゴーシュの細い目がさらに細くなり、その顔に威圧感が増した。

「だいぶうなされてんだ。『ごめんなさいごめんなさい』って何度も謝ってる。医者のマーディに安静剤を打ってもらってやっと落ち着いたんだが、……ありゃあ、精神的に何らかの後遺症が残るかもなぁ」

「え……？」

ゴーシュの言葉にシータの思考が麻痺する。何か言いたくても口から言葉が出てこない。それを代弁するかのように、ゼフィが口を開いた。

「でも命には別状ねぇんだろ？　――なら大丈夫だろ」

その投げやりな言葉にシータはキッとゼフィを睨みつける。その目には確かな怒りの炎が宿っていた。

「ゼフィさん、そんな言い方――！！」

「馬鹿野郎、最後まで聞けよ」

ゼフィはシータの言葉を制し、再び口を開いた。

「霊に憑かれてたんだ。精神的におかしくなっても仕方ない。……ただ、王都、王都オリンピアに行けば“専門”の医者がいる。そいつに診てもらえればあるいは――」

「治るのか？」

「治るの！？」

シータとゴーシュは口を揃えて驚愕の混じった声をあげる。それにやや気圧されつつも、ゼフィは咳払いをしながら頷いた。

「なら行こう！　今すぐにでも！！　行ってマリーを助けるんだ！！」

さっきまでの表情と打って変わって、シータは嬉々とした表情をゼフィに向けた。だがゼフィの表情はシータとは違い、曇り始める。

「お前なぁ……、あそこがどんなところか知ってんのか？　あそこは――」

「よぅし、シータ！　自分の部屋に行って荷物まとめてこい。しば

らくの間お前に暇を出す！」

ゼフィの言葉を遮るように大声でゴーシュはそう言うとドアを開け、シータを外にほっぽり出す。シータはその行為に文句を言わず、それどころかゴーシュに感謝の言葉を述べると、勢いよく階段を駆け上がって姿を消した。

今この部屋にいるのはゴーシュとゼフィの二人だけ。

ドアを閉め、ゴーシュはゼフィと向かい合うと静かに喋り始めた。

「王都オリンピアは、大昔神々が住んでいたといわれる聖なる土地だったな。そしてこのローダンセ大陸の中心に位置するバカでかい国だ。そしてもう一つ」

ゴーシュは無精髭を擦りながら呟く。

「犯罪確立０％、秩序ある国の番犬様がゴミを排除した結果がこれだ。……まぁ今更誰も恨んではねぇだろうがな」

王都オリンピア。ローダンセ大陸のほぼ中央に位置する大型都市である。この国に住む民は皆口とそろえてこう言う。

『ここは平和だ』と。

犯罪確立０を誇るのには理由がある。“秩序”を名に掲げた王国直下の軍隊ベロボーグが、王の命令で異端分子を排除したからだ。排除された異端分子は行き場をなくし、路頭を彷徨う。そして生きるために盗み、恐喝などの犯罪を繰り返すようになった。そしてそれらが集まった街が、黒の街路地（ブラックストリート）と呼ばれるようになる。

「まさか兄ちゃんが軍人だとは思わなかったな。そんな細い体で特殊部隊とはなっ！」

腹から声を出し、快活そうに笑うゴーシュだったが、ゼフィはその逆に不快そうに顔を歪める。

「立ち聞きかよ。趣味悪ぃ」

水晶のような蒼い瞳が細められ、ゴーシュを睨む。だがそんなことはお構いなしにゴーシュは喋る。

「でもよぉ兄ちゃん。なんでシータに嘘ついた？」

その言葉にぴくりとゼフィは反応する。

「嘘？」

「あぁ、嘘だ。シータは騙せても俺ぁ騙せねぇぜ？」

自身気にゴーシュはそう言うと、窓辺に向かい窓を開ける。部屋に冷たい夜風が入り、ゼフィの頬を撫でた。

「寒いか？」と尋ねられたが、ゼフィは黙って首を横に振った。

「髪が長いんでぱっと見わからねぇが、兄ちゃんピアスしてんだろ？　円錐のピアス。そりゃあ王都の軍人の証拠。……色は黒いな。それが特殊部隊とやらの証か？」

「……聞いてどうする？」

ゼフィの一言で部屋の空気は変わる。ぴりぴりとした空気の中、ただ冷たい警戒心を露にしゴーシュに喋ることを許さない。言葉にはしないが目がそう言っていた。

「アンタが王都や軍のことをどこまで知ってんのか俺には関係ねぇけどな、俺には関わんな。うざったい。だいたいアンタに――」

「おっと、そういうわけにゃいかねぇ」

ゼフィが言葉を言いきる前にゴーシュは口をはさむ。

「兄ちゃん言ったじゃねぇの。王都には専門の医者がいんだろ？そこでしかマリーを治せねぇってんなら行くしかねぇだろうが」

「王都に？　はっ、勝手に行けばいいだろ。俺には関係な――」

「だから兄ちゃんが行くんだよ」

一瞬、部屋の時間……、いや全ての時間が止まったような錯覚にゼフィは陥った。

「俺が、どこに……行くって？」

「だから王都、オリンピアにだよ。兄ちゃんしか行ける奴いねぇだろうが」

ピシッとゼフィ自身、己の中で何かが砕けるのを感じた瞬間だった。

「何で俺がそこまでしねぇといけねぇんだよっ！！」

ゼフィが勢いよく立ち上がると、木で出来た粗末な椅子はみしりと嫌な音をたてる。ゴーシュは椅子を心配しながらも、ゼフィの言葉に耳を傾ける。

「俺は！　……俺にはもう関係ない。王都にはアンタが連れて行けばいいだろ！」

「……ほぅ、俺にそれを言うか」

ゴーシュの表情が変わった。眉間に深く刻まれた皺が怒りを表している。

「出来ることなら俺が連れていきてぇよ。だがな兄ちゃん。王都にゃ俺みたいなならず者は入ることも叶わねぇんだ。だからこうして頼んでんじゃねぇかよ」

決して頼んでる者の態度とは言い難いが、ゴーシュの言い分は確かだ。ブラックストリートの人間は、王都に入ることを禁じられている。無理に入れば不法入国として捕まるリスクがある。捕まれば最後、軍が所有している牢屋行きだ。誰もそんなリスクを背負ってまで行く馬鹿などいはしない。

それをゼフィも重々承知していたが、咄嗟に口から出てしまった言葉だ。もはや弁解しようがなかった。

「……悪い。今のは俺が悪かった」

ゴーシュとてマリーを助けたいという気持ちは本当だろう。だがそれを出来ないことがどんなにもどかしいか。救いたいがその力が自分にはないという無力さ。ゼフィにもそれと同じように感じる部分があった。

――あの母猫はちゃんと成仏することができたのだろうか？

心に引っかかる小さな罪悪感。死んで尚も子供に尽くした母猫。あの猫は子供を助けたかったからずっとあの境界にいたんだろう。だが実際どうだ？　子猫を助けるどころか、滅してしまった。それをしたのは紛れもなく自分。大鎌に狩り取られた魂に安息も苦痛も存在しない。魂を消滅させるのだから。

（でもそうしなければマリーは助けられなかった。これが正しいんだ……）

無理矢理自分を納得させるが、心に出来た溝は埋まらない。あの母猫はちゃんと成仏できたのか。もしかしたら自分を恨んで――、

「おい兄ちゃんっ！」

自分を呼ぶ声にゼフィは現実に引き戻される。気付けばゴーシュに名を呼ばれながら肩を揺さぶられていた。

「悪ィ悪ィ。俺も言いすぎたよ。そんな落ち込まんでくれ」

どうやらゴーシュは自分の言葉にゼフィが落ち込んだと勘違いしたらしい。そもそもゴーシュの言葉に落ち込むことなどあり得ない話だが。肩に置かれた手を振り払うとゼフィは一言だけゴーシュに言う。

「じゃあな、俺はもう行く」

そう告げるとドアに向けて歩くが、それは叶わなかった。　目の前にでかい岩山があることを錯覚してしまう。ゼフィは呆れながらも、目の前の大男を睨みながらどうせ通じないだろう言葉を吐く。

「どけよ」

「だが断る」

「……ぶん殴るぞ」

「おぅ、やってみやがれ。どうせ効きはしねぇがなぁ」

げらげらと笑うゴーシュに、ゼフィは頭が痛くなってくるのを感じた。

この大男の力は見てくれでわかる。本気でやりあったらまず勝てないだろう。岩山を拳で壊せと言っているようなもんだ。『無謀』そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

「それに兄ちゃんだって気になるだろう？　兄ちゃんは淡白そうに見えるが、意外といい奴だ。だから兄ちゃんは必ず王都に行ってくれるって俺ぁ信じてる」

にやりと口角を上げながらゴーシュは伸びきった無精髭を擦った。

「何の根拠にそう言える？」

「目だ」

ゼフィの問いにゴーシュは即答した。

「目ぇ見りゃそいつの本質がわかる。兄ちゃんは澄んだ目をしてる。アンタは人を裏切らない」

目が澄んでいる、そう他人から言われたのはゼフィは初めてだった。
平然を装いつつも、心のなかでは微かに動揺していた。この目が澄んでいる？　闇を映すこの目が。化け物と同じように赤く染まるこの忌まわしき瞳が。

――澄んでいると。

「……そんなこと言われたの初めてだ」

つい口から出た本音。きっと今自分はマヌケな顔をしているに違いない。
それを聞いたゴーシュは「へぇ！」と驚いたような声をあげた。

「まぁ兄ちゃんがどう思うかは自由だけどよ、俺はそう思ったぜ？」

その言葉がさらにゼフィの心を揺らす。
物心ついたころから、己の中にいる化け物。その影響で赤く染まることになったこの瞳を何度醜いと思ったことか。
だがその瞳を「澄んでいる」と言われたことにより、ゼフィの中で何かが溶けていくのを感じた。

「……あ、明日には、王都に行くからな。ちゃんと準備させておけよっ」

早口で言った途端にゼフィはそっぽを向く。柄にもないことを言ってしまったと少しばかり後悔したが、すぐにまぁいいか、と考え直した。それはゴーシュの感謝の表現があまりにも激しすぎたのと、

自分の中にあった重たい枷が外れたからかもしれない。

＊＊＊

その後ゼフィは部屋に戻り、休むことにした。シャワーを浴びて部屋に戻ると、テーブルの上にさっきまでなかった紙切れが置いてある。

濡れた髪をタオルで拭きながらその手紙に目を通すと雑な字でこう書かれていた。

―――

オリンピア第二階層、E―12番地　アーティ・クレジス。

シータの父親だ。何かあったらこいつに頼れ。

ゴーシュ

―――

とりあえず客の許可なしに部屋に入るのはいかがなものかとゼフィは思った。内心不満に思いつつも、この手紙の内容は少し気になった。

（“父親”？　ゴーシュは父親じゃなかったのか？）

アーティ・クレジスとゴーシュ・クレジス。ファミリーネームが同じことからゴーシュはシータの叔父か何かだと判断できる。

だがなぜだ？　このアーティという男はなぜシータをゴーシュに預け、自分は王都で暮らしている？　なぜ我が子をこんな環境の悪い

土地に残した？

「まぁ、考えてもしょうがねぇか……」

人には人の事情がある。他人がおいそれと口出ししていいものではない。――だが、何か一波乱ありそうだ。そんな気がした。自分で言うのもなんだがゼフィは勘が当たる方だった。それも悪い方の。悪い未来を見越してか、溜め息を吐きながらゼフィはベッドに沈む。その拍子に紅い髪がまるで花のように散った。

深紅の長い髪。普段は一本の三編みにしているから邪魔にならないが、こうして解くとかなり邪魔だ。背中とベッドに挟まれて引っ張られているような不快感がある。なら切ればいい、と自分でも思うのだがそれをする気はない。――誰かに、切ってはダメだと言われた気がした。そんな約束を誰としたのだろう？　そしてなぜ自分は律儀にもそんな約束守っているのだろうか。

……まぁ、考えてもしょうがないんだが。

曖昧な記憶に蓋をし、目を閉じる。少しばかりの仮眠だ。明日、というより今日なんだが朝早く起きねばならない。昼夜逆転した生活リズムを直さなければ。

そう考えているうちに、しだいに意識は薄れていく。心地よい睡魔に身を任せ、ゼフィは意識を手放した。

＊＊＊

明晰夢というものがある。夢を見ている、と自分で自覚できる夢のことだ。今まさにゼフィが見ているのはそれだった。

（ここは……？）

見覚えのない景色、いやあったかもしれないが遠い昔のことなんだろう。ゼフィに子供のころの記憶はない。思い出そうとすると靄がかかったみたいに頭がぼんやりとするのだ。そのせいかもう思い出そうとすること事態やめたはずだった。

「……」

ならばここは己の奥深くに眠っている深層意識ということになる。なんの前触れだろうか、そう思いつつも、どうせ夢の中のことだという思いが勝ち、暫しこの世界を探索することにした。

＊＊＊

この夢の世界を一言で表すなら『つまらない』

なぜなら景色が一向に変化しないからだ。歩いても歩いても鬱蒼と広がる薄暗い森の中。これが自分の昔の記憶だというなら、内心がっかりだ。いったい何を思ってこんなところにいるのだろうか。そう思いつつもこの夢が覚めなければここからは出られないのだろう。確信はないがそんな気がした。

「……？」

どのくらい歩いたのだろうか。薄暗い森に暖かな光が差し込んだ。あぁ、これでやっと出れるのか。そう思った瞬間、全身の皮膚が粟立つ感覚を覚えた。背筋に霜が張りついたような悪寒が走り、脳が警告している。

『後ろを見てはいけない』と。

（何か、いる……？）

得体のしれない気配にゼフィは身を強張らせる。……だが所詮は夢の世界。見たって、どうってことないはずだ。……そう、どうってことないはず。なのに体がそれを拒む。脳の命令を無視し、固まったように動かない。

（……いや）

違う。動かないのではなく、“動けない”のだ。まるで金縛りにあったように。

再び背筋に冷たい何かが這うのをゼフィは感じた。

所詮は夢なのだ。しかし拭うことのできないこの嫌悪感は本物だった。夢なら早く覚めろ、という思いは届かない。いったいいつまでこの悪夢にいればいいのか。そう思った瞬間、

ふいにコートの裾を“何か”が引っ張った。

＊＊＊

そこで意識は覚醒した。妙に息苦しかった。全身に冷や汗をかいている感覚が気持ち悪い。やっと悪夢から解放されたというのに、脳内に響く鈍い頭痛からは解放されない。

髪をくしゃりと掴み、ゼフィは目を細めた。

「……幸先悪ぃな」

これから王都に行くというのに先が思いやられる。ただでさえ気が重いというのに。

短い溜め息をつきながらベッドから降りる。ふと窓の外を見れば、

ゼフィの心を現すかのように朝靄が立ち込めていた。

＊＊＊

「遅ぇっ！！」

シータが聞いたゼフィの第一声がこの言葉だった。なぜかは知らないが、ゼフィの機嫌が今最高潮に悪い、ということだけはシータにもわかった。

朝靄がじっとりと肌に吸いつき、シータの癖っ毛は大いに乱れている。だが少しでも文句を吐けば、目の前にいる男の機嫌をさらに損ねるかもしれない。シータにしては珍しく気を利かせ黙っていた。なのにそれを打ち破る轟音が鳴り響く。

「おおぅ！　なんだテメェら早いな。せっかくだ。“おはよう”とでも言っておくか？　ハハハッ！　いつぶりに朝の挨拶なんか言ったかな」

空気の読めないゴーシュ乱入。シータ絶句。ゼフィの眉間に深い皺が寄り、額に青筋ができる。だが朝靄で視界の悪い今、いくらゴーシュといえどゼフィの表情までわかるはずなかった。

「おう、馬車に荷物は全部乗せたのか？　せっかく二台も頼んでやったんだ。ありがたく思えよ！」

朝靄が凍りそうなほどの殺気に、なぜゴーシュは気付かないのかとシータは驚愕する。数秒後の修羅場を回避するためにシータは話題を変えた。

「親方、マリーはもう馬車の中に運んだの？」

「おうよ。車椅子に乗せて床に固定してあるから、馬車でも平気だぜ。おっと、マリーと二人きりになろうとか考えてんじゃねぇよケダモノめ」

「べ、別にそんなこと考えてなんか……ッ」

思いがけない言葉にシータがしどろもどろになると、隣から盛大な舌打ちが聞こえてきた。訳すると「さっさとしろ、馬鹿共が」と言ったところだろうか。

「なんでぃ兄ちゃん。息子との暫しの別れなんだ。そう急かすなよな」

伸びきった髭を擦りながらそう言うと、ゼフィはぷいっとそっぽを向いてしまった。さらに機嫌が悪くなったのかと思い、シータは青ざめる。だがゴーシュはそんなこと気にする様子もなく、シータの頭に手を置いて無遠慮に撫でまわす。

「いった！？　何、何すんの！？」

「あぁ？　こんくらいが痛いって……、そんな軟に育てた覚えないんだがなぁ」

げらげら笑うゴーシュは未だにシータの頭を撫でている。摩擦で髪が燃えやしないか、そんなどうでもいい心配をしていると、ごつごつした大きい掌がぽんっと頭に置かれた。

「行ってきな馬鹿息子。風邪引くんじゃねぇぞ」

「……はい、行ってきます。父さん！」

そう小さく言うとシータはすぐに後ろを向き、馬車に飛び乗る。そんな様子を見つつ、ゼフィも馬車に乗り込もうとした瞬間、

「おい、ゼフィロス！」

ゴーシュに呼び止められた。首だけ後ろに向け、ゼフィは視線だけゴーシュに向ける。

「あいつらのこと頼んだぜ！」

そう言うゴーシュの姿はどことなく寂しそうだった。子が遠くに行ってしまうのはやはり心配なのだろう。たとえ血は繋がってなくとも、この二人は正真正銘の親子なのだ。

「……ふん、せいぜい首を長くして待ってろよ」

この二人の関係が少しだけ羨ましいと感じたのは気のせいだろうか、それとも――。

バタンと別れを告げる音が閉まる。

ゼフィは腕組みをし、仮眠を取ろうとしていたが、シータは馬車が走っても尚、ずっと後ろを見ていた。

きっとゴーシュはずっと手を振っていたのではないか。そう思いつつ、ゼフィは静かに目を閉じた。

## 王都オリンピア

王都オリンピア。別名“階層都市”。
第一層から第三層まで分かれており、身分で住む場所が変わってくる。

第一層は、主に貴族や王国の関係者。地位が高い選ばれた者だけが住める階層。噂じゃ大理石の床は当たり前。白を基調とした美しい場所らしいが、それは国民の多大な税によって成り立っているという黒い噂もある。

第二層は、身分証明されている者なら誰でも入ることができる。主に国民が中心的に住む場所でもあり、活気があるところである。こちらも白を基調とした美しい街であり、外から移住してくるものも多い。

第三層は、唯一地上に面している場所である。主に貿易で使われているため、出入りは基本自由だが、何かトラブルがあればすぐさま軍の人間がやってくる。部外者が多く集まるためか、特に警備には厳しいらしい。

そしてこの三つの階層を繋ぐ中心の黒い塔。これが王都の鉄壁を誇る軍隊ベロボーグの本拠地である。

この軍隊は……、いや説明しなくてもいいだろう。

＊＊＊

「……以上で説明は終わりだ……。何か質問は？」

そう言ったもののゼフィの顔には『これ以上ねぇよな？』と言いたげな表情がありありと浮かんでいた。それに気付いてしまったシータは閉口するほか道はない。

もとはと言えば、王都に着くまでの道のりがあまりにも長く、暇だったものでシータが質問したのだ。最初は面倒臭そうにしながらも質問に答えてくれていたゼフィであったが、あまりにもシータがしつこくたくさん聞いてくるので、どうやら機嫌が急降下してしまったらしい。いつもの低い声がさらに低くなり、感情が簡単に読み取れるほどだ。

「それで、あの～…。僕は着いたらどうすれば？」

「あぁ？　マリーを医者に見せに行くんだろーが。お前は鶏以下か？」

鶏。3歩歩いたら忘れるという鳥。残念だがシータは、そこまで頭は悪くない。

「……それは知ってるよ。問題は「どうやって第二階層に僕が入るのか」ってことでしょ！？」

つい大声で言ってはっとする。目の前の悪魔がものすごい不機嫌そうな顔でシータを睨んでいる。

「……お前、身分証明書は、……持ってるわけねぇよな」

ブラックストリート出のシータにとって、身分を証明するものなど何もない。つまり第三階層までしかシータは入れないということだ。

だが、シータがそれに納得するはずもなく、

「よし、わかった。誰かから身分証明書掏ってくる」

“盗み”という何とも端的かつ、最悪な方法に走ったのだ。

「まぁ、掏るならばれないように上手くやれよ」

「うん、わかっ……、って盗んでいいの！？　仮にも軍人！　王都の秩序を守る番犬！　それがあっさり犯罪見逃していい訳っ！？」狭い馬車の中で騒ぎ立てるシータに、ゼフィは頭を押さえて溜め息を吐いた。

「他に方法ねぇだろ。それともあれか、第三階層でうろうろしてたいのか？　いっとくがあそこは多くの奴が集まるから、あんまし治安よくねぇぞ？」

うっと、たじろぐシータに更に追い打ちをかけるようにゼフィは喋る。

「それにな、お前が思ってるほど王都は甘くはねぇよ。第一、第二階層の犯罪確率０％。王都の守りは昔も今も完璧だ。お前みたいな鼠、一匹も通さねぇよ」

ううっとさらにシータはたじろぐ。そんなシータに留めの一言をゼフィは下す。

「ちなみに、第三階層は一番交通量、人の数が多い。紛れるならやりやすいが、その分警備が多い。捕まったら最後……、どうなるんだろうな？」

「そこ知らないの！？」

シータは愕然とした。一番重要な所が抜けているのだ。これではもし捕まったら……、どんな未来が待ち受けているのだろうか。想像すらできない。そんな最悪の展開を予感しつつも、シータはゼフィに尋ねる。

「ゼフィさんはどうやって入るの？」

「仮にも軍人だからな。普通に身分証明書を示すカードキーあるし、……マリーは保護したとか言えば入れんだろ」

……この男、何とも適当だ。シータはまた違う意味で愕然とした。

＊＊＊

「そんなこんなで、着いちゃったんですが……」

結局、何の解決策のないまま時間は過ぎていき、気付けば馬車は止まっていた。降りると馬はヒヒンと小さく鳴きながらシータを見たが、シータは目の前の光景に目を奪われていた。

「うわぁ……」

目の前には溢れんばかりの人、人、人。さすがは第三階層入口前といったところか。活気盛んで見ているこちらが圧倒されるほどだ。さすがは大陸の中央に位置する国だけあって、人種問わず多くの人

がいる。初めての光景に目を輝かせる中、シータを現実へと引き戻す声がした。

「邪魔だ、どけ。さっさと歩け」

その声の主は、なんとも不機嫌な表情でシータを上から見下ろす。オリンピアに近づくにつれて、なぜかゼフィの機嫌はどんどん悪くなっているようにシータは感じた。

「ひどい……」

ダメもとで愚痴ってみるものの、案の定無視ときたものだ。予想していたため、シータにそれほどのダメージはない。

「オイ」

返事をする前に、上から何かが降ってくる。これは出発前にまとめた荷物だ。せめて普通に渡してほしかった、とシータの小さな願いは胸にしまうことにした。今ここでゼフィに逆らってますます機嫌を損ねたら、いろいろと大変なことになる。

実際にゼフィは表情に出るほど機嫌が悪そうだ。いったい何が彼をそこまでさせているのだろうか。だがそれでも後ろの馬車から荷物を出したり、マリーの車椅子を押して面倒を見たりと、案外、責任感が強い方らしい。

「ほらよ」

ゼフィは、何かをシータに向かって投げつけた。それは何かのカードのようで、シータの片手に収まるほどの大きさだった。

「なにこれ？」

「うるさい」

……あまりにも理不尽な扱いにシータは言葉を失った。普通、何かわからないものを渡され、それについて問うたら何かしらの返答は返ってくるものではないか？　だが返ってきたのは「うるさい」の一言。

「……扱い酷くない？　このカードなんな」

バシッと今度は軽く頭を叩かれる。痛くはない、痛くはないが……、この扱いは何なのだろうか。

「馬鹿野郎。空気読め。……それはカードキーだ」

「カードキー？」

ゼフィが小声で喋ったので、シータも小声で話す。

「その白のカードキーがあれば、第二階層までなら入れる。ただし入ったらそのカードはすぐ処分しろ、すぐだ、わかったな？」

あまりの剣幕で言われたものだから、ただシータは頷くことしかできない。

その直後、悲痛な叫びが場をざわつかせた。

「わ、わたくしの、わたくしのカードキーがなぁぁぁぁいっ！！？」

長身で気弱そうな優男が顔を青くして自分のバックを漁っている姿

が目に入った。途端に場がざわつき、警備員がやってくる。軍隊の象徴である狼のエンブレムをつけた警備員、もとい軍隊の人間が。

「今のうちに、それ使って中に入れ。入ったらどっか隠れてろ」

ゼフィは小声でシータを促す。理解できぬまま、いや理解はしていたんだろう。ただシータは認めたくなかっただけだ。まさかゼフィがこんな簡単に掏りを行うとは。

仮にも軍人である立場の人間が、掏りなんてしてもいいのだろうか。だが、現状はそうも言ってられなかった。ゼフィのおかげで今シータは第二階層に入れる手段を手に入れたのだ。

第三階層の奥に進むと、少し広い空間に出る。ここにはいくつかのエレベーターがあり、これが第一、第二階層へと行く手段となっている。だが問題はそこではない。エレベーター前には改札機といかつい顔の警備員が数人いる。おそらくここが一番警備が強いのだろう。上の階に鼠など一匹も通さない、そんな強い気持ちがひしひしと伝わってくる。

だがここを通らなければどうにもならないのだ。平静を保ちつつ、シータはそろりと改札機に近づく。自分の順番が近づいてくるにつれて、じっとりと手汗をかいてくる。もしも何らかのトラブルが起こったらどうなるのだろうか。牢屋行きは確実だがその後は……。

「次」

びくっとシータの心臓が飛び跳ねる。ついに自分の番だ。だが焦っていたら怪しまれる。平静を保たなければならない。自分を宥めつつ、少し高めに位置する改札機にカードキーを押し当てる。早い鼓動を鳴らす中、ピッという機械音とともにロックは外れた。後は歩

いてエレベーターに乗り、第二階層でゼフィを待つだけだ。何だ、簡単じゃないか。だがそんなシータの思いはすぐ打ち崩される。

「止まれ子供」

改札機を通りぬけ、エレベーターまであと少しというところで、警備員に呼び止められた。平静と装いつつも振り向くが、シータの心臓ははち切れんばかりに早鐘を鳴らしている。

「な、何でしょうか？」

思わず片言になってしまう。警備員を見るとゴーシュほどではないが、かなり肉付きのよい体格をしている。シータなど片手で捩じ伏せてしまいそうだ。

「お前一人か、親はどうした？」

「え……っと……」

「親、もしくは大人の同伴者がいなければ子供は入れない。学校で習わなかったのか」

その言葉にシータの目は大きく見開いた。ゼフィの言葉だとカードキーさえあればなんとかなると思っていたが、どうやら甘かったらしい。突然の緊急事態でシータの頭はパニックになる。

「それにな」

警備員の目が一瞬ぎらついたように見えた。まるで怪しい人間を見つけた番犬のようだ。このままではまずいと本能的にシータは感じ

る。

「このカードキーの持ち主は『ハワード・フィリップ』という三十代の男だ。……お前はいったい何者だ？」

――ばれた。

何を思ったかシータは脱兎のごとくエレベーターに向かった。だがそれを逃がすほど警備員も甘くはない。

「このガキィ……ッ！待てっ！！」

警備員の手がシータを掠めようとしたその時、ヴーッ、という警告音が背後で鳴り響いた。何者かが改札機に引っかかったときに鳴る警告音。咄嗟に警備員は後ろを振り向いたが、その一瞬でシータは警備員を振り切り、ちょうど着いたエレベーターに駆け込んだ。次に警備員がシータを見たのはちょうどエレベーターの扉がしまったときだった。

＊＊＊

またこの王都オリンピアの警備が強くなったのだとゼフィは感じた。

確かにここのカードキーは、身分証明書を兼ねている。改札機はそのデータを読み取り、個人情報を割り出し、警備員がそれを確認して初めて中に入れるというシステムだ。もちろんデータの中にはカードキーの持ち主の顔写真、年齢、性別その他もろもろの個人情報がぎっしりと詰まっている。これを欺くのなど端から無理なのだ。

ではなぜゼフィはそんなことをシータにやらせたのか。そんなのは簡単なことだ。

（邪魔なガキの排除はこれでいいか）

ゼフィはこれから第二階層へと行き、シータの父親と名乗る男に会いに行くつもりだ。シータの家族問題など知ったことではないが、面倒事を避けるため事前準備。シータには悪いが、しばらく警備員との追いかけっこをしててもらおう。と、その前にマリーを診せに行くために第一階層まで行かなければならないのだが。

第一階層に行くために必要な黒のカードキー。これを使うのは四年ぶりのことだ。もう使うことはないだろうと思っていたが、また使うことになるとはとゼフィは内心苦笑する。

改札機前に行くと何やら騒がしい。どうやら何かトラブルが発生したのか。見れば馴染みのあるブロンドの少年が警備員に尋問を受けているではないか。まぁ、当たり前といったとこか。

だが助けるつもりなど毛頭ない。あれはあれでなんとかするだろう。そう思い、改札機にカードキーを押しつけた瞬間、

ヴーッ

「……は？」

これは確か警告音。改札を引っかかったときにでる音のはずだ。周りにいる人間は全員自分の方を見ている。……まさか引っかかったのか、俺が？

ふと警備員と目が合う。その隙をついてか、シータはエレベーターに乗ることに成功したようだ。それはそれでいいのだが、こちらは

最悪の事態のようだ。
数人の警備員が何やら無線機で連絡を取り合っている。おそらく紛れた鼠を探すためだろう。そのうちの一人がこちらに、ゼフィのもとへとやってきた。

「アンタ、名前は？」

「……ゼフィロス・エンリル」

まさか自分が引っかかるとは思わなかった。……いや、そういえばカードの更新は一年に一度。なるほど、引っかかるわけだ。
改札からでたデータと、過去のデータを小型端末から照らし合わせられ、再び尋問を受ける。

「最終更新が四年前……。アンタ軍を離れてどこで何してたんだ？
ええ？」

軍隊所属ということもばれている。さすがは最先端の科学技術。自由も何もない、全く……、反吐が出る。

「テメェには関係ない話だ。さっさと通せ。病人がいるんだ」

そう言うと男はゼフィが押している車椅子に目をやる。そこには亜麻色の髪の少女が静かに眠っている。この騒ぎですら起きないとは、まるで人形のようだ。

「この子供は何だ？　ちゃんとした身分のある子なんだろうな？」

「身分がなきゃ、病人は診てもらえないのかよ？」

警備員は丸い鼻を掻きながら嘲笑う。

「当り前だろう？　どこの誰かもわからない……、ガキでもそうだ。そんな危険分子、上の階層に上げるわけにはいかない」

「テメェ……ッ！！」

本当に、ここの国は、軍にも規律にも呆れてものが言えない。……腐ってやがる。

「いいからさっさと通せよっ！　俺の身元がわかってりゃいいだろっ！？」

「馬鹿が、アンタも軍人の“端くれ”なら軍の規律が何を意味するかぐらいわかるだろう？」

ぶちっと、その一言でゼフィの中の何かが切れた。

「待ちなさい」

そう言われたのはゼフィの拳が警備員の顔を殴ろうとした瞬間だった。背後から宥めるような、諌めるような声に咄嗟に我に返ったのだ。

警備員は慌てたように目の前にある手を振り払うと、顔を歪ませながら第三者を見た。

「これはお話し中に失礼。先程紛失したカードキーを再発行したのですが……。確認を頼めませんかねぇ？」

酷くのんびりとした場違いな声だった。それに数いる警備員の中で

なぜわざわざこいつに聞いてきたのだろうか。
男から乱暴にカードを奪うと小型端末でデータを確認し始める警備員。それに「よろしくお願いします」と丁寧に挨拶する男。場のぴりぴりしていた空気が多少良くなった気がした。ゼフィがこの謎の男を横目で見れば、それに気付いたのか男は柔らかく笑った。

――この男、どっかで見たことが……。

「はい、確認が終わりました。ハワード・フィリップさんですね。前のカードは停止させたのでご安心ください」

あぁ、そうか。……カードキーを掏った男か。って、そうじゃない。ハワード・フィリップ？　こいつが？

「あぁ、それと彼のことなんですがねぇ。わたくしの知りあいでしてね。それにこのお嬢さん、“例の病気”の患者さんでしてね。通してくれませんかねぇ？」

フィリップがそう言うと警備員の顔が険しくなった。そしてこそこそと無線機で誰かに連絡を取り始める。

「……フィリップ？　お前本当にあのフィリップなのか？」

「これはこれはゼフィロス君、久しぶりだねぇ。また背が高くなったみたいだね」

こののんびりとした話し方、間違いない。確かにフィリップだ。だが気になる点が一つ。

「アンタ、その髪型いったい……」

目線を少し上にやれば、みごとな黒髪。と言いたいところだが、この爆発したような髪型は何なのだろう……。
ゼフィの言いたいことに気付いたのか、フィリップは気落ちした様子で答える。

「本当は短くするつもりだったんだけどねぇ。あちらさんの手違いで“アフロ”という髪型にされてしまってね、でも美容師さんが「すごい似合ってますよ〜」って言うものだから、何も言えなくなってしまってねぇ……」

気弱だな、と久しぶりに会った知人の性格を改めて実感した瞬間だった。　そんな気弱な知人、フィリップを哀れんでいると先程の警備員が少し青ざめた表情でこちらに戻ってきた。

「“例の病気”の患者なんですね？　この子が。……上と連絡がつきました。第一階層までお進みください」

さっきと打って変わって、随分と下から言うようになったものだ。
不思議に思い警備員を見つめると、ひぃっと短い悲鳴をあげられてしまった。

――これは明らかな拒絶と恐れ。

どうやらばれてしまったらしい。自分がどこに所属し、どのような人間かを。まぁ問題ない。こんな反応もう慣れたものだ。

「御苦労さま。……あぁ、それと。彼のカードキーが切れているみたいだから、再発行しといてくれるかい？」

フィリップの頼みに警備員はただ頷くだけだった。自分より地位のある者の前だとこんなにも人は変わるのか、と思わず苦笑してしまう。

「それでは行こうか」

フィリップが先導し、車椅子が通れるように道を開けてくれる。ちょうど上からエレベーターがやってきて、それに乗ろうとした際、後ろから声をかけられる。

「……ゼフィロス・エンリル様、先程の数ある暴言大変失礼しました」

俺がその言葉に振り向くことはなく、エレベーターの扉は静かに閉まった。

＊＊＊

「誰だよ、俺のことあのアホ狸に喋った馬鹿は」

そう文句を言うゼフィにフィリップは、微笑ましい表情を向ける。

「口が悪いよゼフィロス君。そこはいくつになっても変わらないねぇ」

終始ニコニコと喋りかけるフィリップにゼフィは少し呆れているようだ。

「そういうアンタは髪型以外は変わらないな。……その口調も四年たった今じゃ懐かしく感じる」

最初はそのとろい喋り方にどんなにイラついたことか。今は特に気に障ることもなく、こうして喋っているわけだが。

「四年、ねぇ。長いようで短い。君がいなくなってからいろんなことがあったんだよ？」

「俺には関係ない話だろ。それより、アンタから見てマリー、……その子の容体はどう思う？」

ふっと、ゼフィの表情が曇ったのをフィリップは見逃さなかった。ゼフィが押している車椅子に乗る少女。亜麻色の髪と白く透き通った肌を持つ少女は、まるで等身大の人形のようだ。フィリップの垂れ目がちな目がマリーをまじまじと見つめると少し表情を固くした。

「霊に憑かれたんだよねこの子は。……全く、君はいつも難しい患者ばかり連れてくる」

「そういう患者を診るのがアンタの仕事だろ。で、どうなんだ。“例の病気”は進行してんのか？」

「……“人形（ドール）症候群”ね。霊に憑かれた際、精神と魂を蝕まれ、さながら生きた人形のようになってしまう病。んんー、これは“呪い”と言った方が正しいのかなぁ」

「呪い、ね……」

人形（ドール）症候群。赤い満月出現以降、少しずつ広がっている謎の病。ただこの病気の感染源はウイルスや細菌ではない。

“霊に憑かれた”その一点だけが発症原因だと今は考えられている。そして恐ろしいのがその症状である。徐々に体の感覚は麻痺していき、自力では動かせなくなる。次第に意識もなくなり昏睡状態に陥る。“自分では動くことができない”まるで人形のようだということでこの名前がついた。そしてそれを名づけたのは今ゼフィの目の前にいるこの男、心霊学者兼医者を職業とするハワード・フィリップである。

「治る、のか……？」

ゼフィの問いにフィリップは表情を固くしたまま言う。

「ゼフィロス君、この病の治療法は今のところ見つかっていない。……それは君が一番よく知っているはずだろう？」

その言葉にゼフィは唇を噛み締めた。その表情は複雑だ。自分ではどうすることもできない現実を受け入れることしかできない。だが、受け入れることなどできない。そんな顔。

「まぁ最善は尽くすがね。もしかしたら“才能”があるかもしれないしねぇ……」

才能、ゼフィはそれについて何か言いたそうな顔をしたが、それは遮られた。エレベーターがゆっくりと速度を落とし、扉が開いたからだ。

＊＊＊

第一階層、ここに来るのも四年ぶりだ。相変わらず白い街作りに美しい大理石の床。ここを見たら誰しもが美しいと目を輝かせるだ

ろう。だがそんなのは表面上のみ。ここは町も人も、一枚捲れば醜く汚いものだ。

「まぁた、難しい顔をしているねぇ。そんなにここが嫌いかい」

「あぁ、嫌いだとも。こんなとこに住んでる奴の気が知れない」

間髪入れずにそう言い放つゼフィにフィリップは、やれやれと呆れたように溜め息を吐いた。

「まぁねぇ。わたくしもここは嫌いだ、嫌いだとも。だが近々ここに移住することになっちゃったんだよねぇ」

「は？」

フィリップはのんびりとそう言ったが、それは一大事だ。ぽりぽりと頬を掻いている暇などないというのに、相変わらずこの男は己のペースを崩さない。

「どういうことだよ？　アンタは第二階層に住んでたはずだろ？ここには通ってたはずじゃねぇか。それなのに何でまた……」

「んー、そうなんだけど“命令”なんだしょうがないさ。あっ、そういえば……」

フィリップは何か思い出したように手をぽんっと叩いた。そしてゼフィに向き合うとその右手で――、

「チョーップ！」

「いって！　……あ〝ぁ？　テメェ何しやがんだ！？」
突然フィリップからの謎の攻撃に思わずゼフィは蒼眼でフィリップを睨みつけるが、当の本人は悪びれた様子もなく、爆発した髪を撫でていた。
「まぁまぁ、落ち着きなさいな。だって君さ、第三階層でわたくしのカードキー盗ったじゃないの？　悪いことをしたら叱る。これ大人の常識ね」
「……っ！　気づいてたのかよ」
「わたくしを誰だと思ってるんだい？　君の行動パターンなどお見通しさ。ま、白のカードキーは再発行したからいいとして、黒のカードキー盗られたら洒落じゃ済まなかったんだよ？」
そういうとご丁寧に白と黒、両方のカードキーを見せてくる。白は自宅用、黒は病院、研究所の鍵も兼ねている。確かに白の方はすぐに再発行できるが、黒だとそう簡単にはいかない。そんなことゼフィだってわかっているはずだ。なのにこうも子供扱いされるとは腑に落ちない。
「うるせぇな、悪かったな。どーもすみませんでしたっ！！」
「まぁいいけどねぇ」
……いいのかよ。そう思ったがあえて突っ込まないことにしておいた。
そんな会話をしているうちにフィリップの病院兼研究所の前へと着

いていた。

「懐かしいかい？」

その言葉にゼフィの表情が引きつる。

「嫌みな野郎だな。娘に嫌われんぞ」

「そんなことはない。リリアンヌはわたくしのこと大好きだし、わたくしもリリアンヌが大大大好きだからねぇ」

こんなところでどうでもいい娘自慢に時間を取られるわけにもいかず、ゼフィはフィリップを置いてさっさと中に入っていく。もちろんフィリップが鍵を開けてくれたから入れるわけだが。

＊＊＊

白を基調とした清潔感のある中、やはり病院だけあって薬品の臭いが鼻に付く。顔を少し顰めると、それに遅れてきたフィリップが気付く。

「あぁ、すまないねぇ。嗅覚が良い分君は薬の臭いが嫌いなんだっけ」

「別に気にしなくていい……」

そうは言ったものの、相変わらずゼフィの表情は固いままだ。気を利かせて、フィリップが「こっちだよ」と場所を変えてくれたことに、内心ありがたいとゼフィは思った。

フィリップに促されるまま歩いて行くと、地下へと続く階段がある。――ここには見覚えがある。

「フィリップ、最善を尽くしてくれるんだよな？」

「そうだよ」

「……なら、何で研究所に行くんだよ？」

この階段を下りると黒い扉がある。そこはフィリップのカードキーのみで開けられる秘密の地下研究所。

「あのねゼフィロス君。何回も言うようだけど、人形症候群は普通の病気じゃない。だから普通の病院で扱うわけにはいかないんだよ」

「でも――」

「それにね」

先を言わせないかのようにフィリップは言葉を繋げた。

「動かない“人形”ならまだいい。でもね、万が一また“憑かれたら”どうする？　一度霊に憑かれた者は再度憑かれやすい。ましてや自我がない状態の人形症候群の患者に憑かれたらどうなると思う？」

自我がない。人形症候群は人形になってしまう病、いや呪い。そんな空の器に霊が取り憑いたらどうなるか。……簡単なことだ。霊がその人物に成り変わる。そして――、

「魂が入れ替わる。“理”に従い、肉体はもう一つの、本来の魂を

追い出そうとするだろう。聞いたことはないかい？　昔、霊に取り憑かれて除霊したにも関わらず、性格が全くの別人になってしまった、っていう人の話」

フィリップが説明を終えた頃には、場の空気が沈んでいた。目の前にいる紅い青年はただ黙って俯いていた。

……ゼフィは、何も言えなかった。言うには経験も知識も、現実も知らなかった。――これで“助ける”など、なんて簡単なことを口にしてしまったのだろう。自分にはそれを為せる力など微塵もないというのに。

「泣かないでゼフィロス君」

「……あ？　誰が泣くかよ馬鹿野郎」

フィリップの心配そうに告げた言葉は、罵声によって否定される。

「それでこそ君だ」とフィリップは柔らかく微笑んだ。

「事情はよくわかった。……ここはアンタの病院と研究所だ。アンタに従う」

それでもやはり心のどこかでは納得出来ていなそうな表情をゼフィは浮かべていた。それについて特に何も言うことなく、フィリップは下に続く階段を下りて行った。

黒い扉を開ける音がゼフィにとって、とても無機質なものに聞こえた。機械なのだから当たり前なのだが、それでも冷たくて暗い所に閉じ込められてしまう錯覚に陥ってしまう。

実際は、先程の病院の作りと対して変わらない。白を基調とした世界は清潔感に溢れている。ただ普通と違うところといえば、大量の

柵付きの個室とそこを観察するためのマジックミラーで遮られた部屋。
まるで実験動物を観察するためだけに用意された場所みたいだ。フィリップを悪く言うわけではないが、ゼフィは内心そう思っていたし、思うのも嫌なのでここには来たくはなかった。

「やっぱり懐かしい？」

「……ぶっ殺すぞテメェ」

今度の蒼眼には怒りだけではない、憎悪と少しばかりの殺気が含まれていた。

「ごめんごめん、トラウマを抉る真似しちゃって。でもその分じゃ十年ぐらい前の記憶はまだあるってことだね。検診にこないから心配してたんだよ」

「余計なお世話だ」

ツンと前にもまして無愛想になったゼフィにフィリップは苦笑する。そのまま黙って歩きだすと、ゼフィも黙ってついてくる。
　そして一番奥の個室でフィリップは足を止め、扉を開ける。一見何の変哲もない病室に見えるが、ここも壁に遮られた実験場なのだ。……こんなところをシータに見られたらあいつはどう思ったのだろうか？

「ゼフィロス君？」

ふと考えに耽っていた時、フィリップが不思議そうにゼフィを見ていた。絡みあった視線を逸らすとゼフィは病室に入り、用意されて

いたベッドにマリーを寝かす。今までの騒ぎですら目を開けないとは、やはり病気が進行しているのだろうか？　マリーの体は驚くほど軽かった。一か月、あの境界に閉じ込まれていて、ちゃんと食べるものもなかったのだろう。加えて霊の影響がもっとも強い境界で一カ月を過ごしていたのだ。浸食は想像以上に進んでいるのかもしれない。

「あの様子じゃ、浸食レベル４ってところかな。人形になる前の一歩手前だね」

病室から出てフィリップに言われた言葉にゼフィは少なからず動揺した。“浸食”とは肉体、精神が霊によって蝕まれることをいう。徐々に精神が霊によって侵され、霊に成り変わられてしまうのだ。つまり体を乗っ取られるわけである。

しかし、霊を体から切り離したとして、その浸食が治まるわけではない。霊によって侵され続けた肉体と精神は、疲弊し次第に動かなくなっていく。これが“人形症候群”の正体である。

浸食には五段階のレベルがあり、レベル５になってしまったらもはやただの人形。生きているだけの人形になる。多くの場合、家族や周りの人間から気味悪がられ、厄介者扱いをされるので、このまま軍や研究所に引き取られ実験動物として生きるか、廃棄処分されることになる。

突き付けられた現実にゼフィは鈍器で頭を殴られたような衝撃を受ける。眩暈、吐き気。立っているのもやっとの状態だ。

「ゼフィロス君……？　だいじょう……」

「俺に触るなッ！！」

剥き出た殺意に咄嗟にフィリップは後ずさった。獣のように縦に長く伸びた瞳孔。今にも襲いかかってきそうな迫力をゼフィはその目に宿している。だがそれは瀕死の獣の威嚇ともとれる。現に今、ゼフィの顔色は青白く血色が悪い。おそらく、いや間違いなくこの場にいるのはゼフィにとってかなりの負担がかかっているのだろう。それは当たり前のはずだ、ゼフィにとってこの場所は――。

「ゼフィロス君、……ゼフィロス。大丈夫、ここには君の敵はいない。君を人形として扱う者などいないんだよ。だから落ち着いて」

「……っ」

「わたくしも軽い発言と、君を追い詰めることを言ってしまい悪かった。謝ろう。彼女のことはわたくしが最善を尽くそう。だからゼフィロス、落ち着きなさい。君の“人形症候群”も治ってはいないんだから」

まるで子供をあやしつけるようにフィリップは、ゼフィの頭を何度も撫でて落ち着かせようとした。

幾分、落ち着きを取り戻したゼフィは大きく息を吸って深呼吸をした後、小さな、彼らしくない弱気な声で告げた。

「悪い……、……ありがとうフィリップ」

小さな謝罪を受け止めたようにフィリップは、子供をあやすようにしばらくゼフィの頭を撫でていた。

＊＊＊

「んー、本当に休んでいかなくていいのかい？」

研究所から出ると外の冷たい風が心地よく、ゼフィは大きく息を吸った。だいぶ具合も良くなったし、もうここでの用事も済んだ。次の用事も済まさなくてはならない。
未だにフィリップはゼフィの具合を心配している。……全く、おせっかいで心配性な奴だ。感謝は、……しているけども。
もし自分に親がいたらこんな感じなのか。いや、こんな感じだ。なんせ俺の親代わりをしてくれているのはこいつなんだから。

「今日泊る所はあるのかい？　どうせ軍には帰らないんだろう。なんならうちに来なさい。妻と娘も喜んで歓迎してくれるはずだ」

このおせっかいがたまに無性に嬉しく思うことがある。身寄りのない、ましてや人形症候群の自分をこう暖かく迎えてくれる辺りが。
ま、いつもはただのおせっかいで気弱なおっさんなんだがな。

「時間があったら寄らしてもらう。場所は確か……」

「あぁ、Ｅ－１番地。東地区の高台にある家で可愛らしい煙突がついてるよ。リリアンヌにせがまれてつけた飾りなんだがねぇ」

頬を掻きながらデレッとした表情で喋るその姿は、……親馬鹿だ。

「Ｅ－１番地……？　ならフィリップ。“アーティ・クレジス”って奴知ってるか？　確か同じ地区で１２番地に住んでると思うんだけどよ」

その問いにフィリップはしばらくアーティ・クレジスという名をもごもごと呟いているようだった。

「アーティ、アーティ・クレジスさん……、あぁっ！！」
いきなり大声を上げられたものだから、ゼフィは少しだけ肩をビクつかせた。
「なんだよ、いきなり大声出しやがって……」
「あ、あぁすまないねぇ。ってゼフィロス君。その人の名前どこで知ったんだい？」
「……？　今俺の連れの父親らしいんだけど、よくは知らねぇ」
もう一人子供の連れがいるって告げると、フィリップは黙り込んでしまった。何か喋りかけようとゼフィが口を開いた瞬間、それは遮られる。
「あのねぇ、ゼフィロス君。アーティ・クレジスさんっていうのは、私と同じ医者……、呪術医だよ。そして……」
そこでフィリップは言葉を濁したが、ゼフィは視線で次の言葉を訴えていた。
「……フロウ・レッティさんの右腕でもある。君は、一度会ったことがあるはずだ」
「……ッ！！」
脳にその名前が木霊した。アーティ・クレジスの？　いや違う。フレウ・レッティ。あの忌々しい名前が。

「何で、そいつの名前が出てくんだよ……？」

「ゼフィロス君……」

ゼフィの目は、明らかに動揺していた。彼らしくない反応だが、この名前を耳にすれば当たり前だとフィリップは思った。

「……会いに行くのやめた」

「え？」

吐き捨てられるように言った言葉。フィリップは目を丸くした。

「でも会いに行くんじゃないのかい？」

「そう思ったよ。けどな、あの男には関わりたくない。それにあの男の右腕？　はっ、だとしたら会うまでもない。最悪な糞野郎に決まってる」

ゼフィらしくない、憎悪の籠った瞳がさらにその言葉に重みを含ませていた。

「ん～、でも一応言っておくよ。彼は優秀な呪術医。人形症候群専門の医者だ。私と以前一緒に働いてたが、五年前に軍に引き抜かれてね、それ以来会ってないかな。なにせフレウさんが自ら引き抜いて傍に置いてるからねぇ」

「あいつ自ら？　そんなに優秀なのか？」

フレウ・レッティは優秀な者しか傍に置かない。いや、自分の役に

たつ者しか傍に置かないと言った方が正しい。そんなフレウにひと目置かれるならば、アーティ・クレジスはよほど優秀な男なのだろう。

「まぁ彼は、人形症候群に何やら人一倍熱心でねぇ。もしかしたら私よりも詳しいかもしれない。だから当時のフレウさんは彼を引き抜いたんだろう」

「自分の駒、としてだろ？」

そう言い捨てるゼフィにフィリップは、困ったように笑った。

「ゼフィロス君、君がフレウさんを嫌う理由はわかっているつもりだが……、それとこれとは話が別だ。アーティさんは優秀だ。マリーちゃんのことだって何かわかるかもしれない」

「……だったらっ！」

ゼフィが言いかけた時、フィリップは頭を左右に振った。

「わたくしはまだ“正式な”軍の人間じゃない。だからわたくしから言うのは難しい。その間にもあの子の病気は進行している。だからゼフィロス、……君が会いに行くんだ」

揺るがない意思を宿した黒い瞳が、ゼフィを静かに見つめていた。

「でもね、君にも心の準備がいるだろう。しばらくそこらをぶらぶらして落ち着いてきなさい。そんな顔じゃあ軍の人間に馬鹿にされてしまうよ」

「フィリップ……」

「大丈夫、マリーちゃんのことはわたくしが最善を尽くす。わたくしが約束を破ったことはあるかな」

その言葉にゼフィの表情は、少しだけ柔らかくなった気がした。

「……わかった。アンタの言うとおり少し時間を潰す。でも今日中には会いに行ってみる」

「それでこそ君だ」

フィリップも柔らかく微笑んだ。

＊＊＊

フィリップと別れた後、ゼフィは第二階層に来ていた。第一階層をぶらぶらしていたら軍の人間に見つかるかもしれない。ただでさえ四年もの間、何の連絡も入れなかったのだ。心配はされていないだろうが、いたらいたで連れ戻される可能性もないわけではない。もうあんな所に帰るのなんてごめんだ。その分、第二階層は人が多く、見つかる心配は少ない。隠れるなら人の中にいた方が安全だろう。

（……それにしても）

行くと啖呵は切ったものの、どうしたらよいものか。フレウの右腕……、ならば軍にいるはずだ。ここ第二階層からでも軍隊本部には行ける。中心に聳える黒い塔、通称バベルの塔。あそこは軍隊関係者が個々の部屋を持っている。ならばあそこに住んでいるのだろ

うか。だとすればゴーシュから貰ったメモは何の意味もないただの紙切れになってしまう。

（とりあえず、E―12番地に行ってみるか）

どうせ何の意味もないだろうが行ってみよう。そしてダメだったら、ここは腹を括るしかない。

そう思いながらゼフィは聳え立つ黒い塔を見上げた。

＊＊＊

こつこつと目の前の扉を叩く。当然反応は返ってくるわけでもなく、やっぱりなとゼフィは溜め息をこぼした。

E―12番地。東地区の一番外れに位置するここは比較的静かだ。全部の家を確認したが目ぼしいのはここだけ。加えて空き家ならば、間違いない。ここがアーティ・クレジスの家だったんだろう。

これでささやかな望みも消えた今、ゼフィが行く場所はただ一つ。

「行くしかねぇのか……」

諦めにも似た呟きがぼそりと出る。

その時だった。

「いたかっ！？」

「いや、こちらにはいない」

「なんとしてでも探し出せっ！！　くそ、あのガキどこ行きやがったっ！？」

表の通路に二人の男。軍服を着ている、軍人か。咄嗟に路地裏に隠れたゼフィだったが、二人の会話に重要なことを思い出した。

（やっべ、シータを探してんのか）

思えば不法入国をしているシータのことをすっかり忘れていた。フィリップとの話とアーティに気を取られていてそこまで頭が回らなかったというべきか。

……にしてもよく見つからないでいられるものだ。シータの隠れる技術が高いのか、それともあの連中が脳なしなだけなのか。

なんにせよ、今シータを探し出すわけにはいかなくなった。ただでさえ面倒事を抱えているのにこれ以上増やしてたまるものか。この分で行けば、まだ見つからないでやり過ごせるだろう。頑張れよシータ。

シータには届かないエールを送ると、ゼフィはその場を後にした。

＊＊＊

（僕はいつまでここにこうしていればいいのだろう）

そう一人シータは悩んでいた。

第二階層に着いたのはいいものの、気がつけばそこら中に灰色の軍服を着た軍人の姿が。第三階層にいた警備員と同じ格好をしている。おそらく、いや確実に自分を探しているんだろうとシータは理解した。

そして自分を一向に探しに来ないゼフィにも若干イライラし始めた頃だった。もうあれから何時間か経過している。いくらなんでも遅すぎる。もしかしたら忘れているのか。そんなことを考えたとき、そう遠くない場所で忙しなく歩く足音が聞こえ、シータは咄嗟に蓋を閉めた。

（いつまで……、このポリバケツの中にいればいいの……）

ちょうどよい大きさのポリバケツを路地裏で発見した。中身も空だったので、これはいい隠れ場所を見つけたとシータは密かに安堵していた。だが、こんな長い時間ポリバケツにいるとは思っていなかった。しかも軍人がうろうろしているため、出るに出れない状況。いつこのポリバケツの蓋が開けられるかもわからないなか、不安と少しばかりの怒りを抱えたまま、シータはただゼフィを待つことしか出来なかった。

＊＊＊

ふと、誰かに呼び止められた気がした。周りを見渡すとそれらしき人物はいない。変に思いながらもゼフィはそのまま足を進めると、急に違和感を感じた。

（誰かに見られている？）

そんな気がしたのだ。姿の見えない何かに凝視されているような不快感。

……もしかしたら俺を知ってる奴に見つかったのか？

そんなことを考えて警戒したのか、ゼフィは近くにあった建物にさ

りげなく入った。入ってから閉まる自動ドアをしばらく見ていたが、自分が入って以降、誰も来る気配がないことからあれは気のせいだったのだと考え直した。

（ここは、図書館か）

偶然入った場所は、物静かでたくさんの本が並ぶ図書館。そんなに大きな場所ではないが、時間を潰すのにはちょうどいい。万が一ということもあるので、しばらくこの図書館で時間を潰そう。少し進むとカウンターはあったが、係の人間はいなかった。まぁ本を借りるつもりもないし、いちいち気にすることはしなかった。

特に読む本もなく一階から二階に移動すると、風が頬を撫でた。二階の部屋は換気のためか、いくつか窓が開いていた。少しばかり冷たい風を心地よいと思いながら周りの本棚を見渡すと、一冊の本に目が留まった。正確にいえばその本が本棚から落ちていたから目に留まったのだが。何気なくその本を拾い上げてぱらぱら捲ると、イラスト付きの小説のようだった。小説と言っても子供向けのものだ。子供がこの本を読んで、ちゃんと本棚に戻さなかったんだろう。そう思いながら本を閉じると、数枚の紙が本から落ちてしまった。だいぶ古い本だったから痛んでたのだろう。このことは係の奴に言ったほうがいいのだろうか。

（この話……）

最初の方のページだったのか、落ちた紙には「竜と少女」という題名が書かれていた。この話は有名な神話だ。世界の破壊と創造を書いた物語。
落ちた数枚にゼフィが目を通すとこう書かれていた。

＊＊＊

【竜と少女】

一匹の竜がいた。
漆黒を纏う双頭の竜だった。

竜は、世界の頂点だった。

その傲慢は、どんな生物も平伏した。
その憤怒は、ありとあらゆるものを破壊した。
その怠惰は、見る者全てを石に変えた。
その強欲は、全てを手に入れたいと願った。

一人の少女がいた。
白い、雪のような可憐な少女だった。

その色欲は、少女を魅了した。
その暴食は、淡い恋心を飲み込んだ。
その嫉妬は、もう片方の竜へと向けられた。

世界は焼ける。赤く、紅く、ただ緋く。
命が燃える、赤く、紅く、ただ緋く。

少女は泣いた。ひたすら泣いた。
やがて少女は、自ら招いた罪の業火に燃やされた。
残された灰からは、真白な竜が生まれた。

白の竜は、黒の竜の元へ行き、
聖なる裁きを与えた。

黒の竜は、茨に囚われ長き眠りに着いた。
双頭の一つを切り落とされ、
世に災いをもたらす七つの力を封印された。

双頭の争いはこうして終わりを迎えた。
白き竜は、何を思ったのだろうか。

返り血を浴びて真っ赤に染まったような満月。
白き竜は、いつまでもその月に向かって啼き続けた。

＊＊＊

昔、この世界には竜がいた。その竜は世に禍をもたらす邪神だった。その邪神が恋したのは一人の少女。双頭の頭を持つ竜は片割れを邪魔に思うようになり、殺そうと考えた。だが二頭の争いは終わることはなかった。争いは続き、世界は終焉を迎えようとした。その終焉の名を『ラグナロク』
――神々の黄昏、と消えさる世界を見て人々はそう呼んだ。

だがそこに真白の竜が現れた。このラグナロクを引き起こしたきっかけの少女は、業火に焼かれ白い竜となった。
白い竜が黒い竜を封印し、こうして世界に平穏がもたらされた。

――黒い竜による破壊と、白い竜による創造。
こうして新しく創造された世界に今、俺達は住んでいるという物語。

＊＊＊

ゼフィは数枚の紙を本に戻し、そのまま近くの机に向かった。椅

子に座り、さらに本を捲ってみるとまた懐かしい話があった。『白銀の群れ』という話。
『竜と少女』から世界が創造された後に繋がる話。確かこの話は……。

そう思ってゼフィは本を捲るのをやめた。本を見るにつれ、だんだんと眠気が襲ってきた。頭がぼーっとして思考が鈍ってくる。何でこんなに眠いのだろうと考えるのも面倒になってくる。今日はいろいろなことがあって疲れてるだけだろう。そう自分を納得させた。

「……ん…」

立ち上がろうとした瞬間、眩暈にも似た眠気が襲った。強烈な眠気だ。きっとこのままだと道端で倒れて眠りそうだ。

（少しだけなら……）

寝てもかまわないだろうか。どうせ誰もいないんだ。ばれやしない。そう思いながら抗えない睡魔にゼフィは落ちていった。

自分を見ている影があることも知らないまま……。

## 潜む影

また、とゼフィは思った。
夢を見ることなど滅多にないというのに、また見てしまった。薄暗い森の夢を。しかもこれが夢だということを自覚しているならば、これは明晰夢。あの時見た夢と全く同じ内容にゼフィは溜め息を吐いた。

森はあの時と何も変わっていないようだった。薄暗くて肌寒い。空を覆い隠すように茂る葉のせいか。なんにせよ、ここにいていいことは一つもなさそうだ。だが覚める気配もない。……念じるしかないのだろうか。

（確かこの前は……）

ふと思い出す。確かこの前は――、そうだ。得体の知れない“何か”がいたんだ。そしてそれに引っ張られて目を覚ましたんだっけ。って、よくそんなこと覚えてんな俺は。
普通夢ってのは、曖昧なもので忘れることが多いっていうのに。よほどあの悪夢は印象深かったのだろうか。

――それにしても、あの時感じたのは……。俺の後ろにいたのは何だったのか。
背筋を凍らせるような悪寒、脳内に激しく木霊する警告音。まるで後ろを振り返るなと言っているようだった。――思いだしてはいけない何か。夢は記憶の反映というならば、あの時、俺の後ろにいたのは――。

刹那、空気が重苦しいものに変わるのをゼフィは感じた。途端に

頭がぐらりと揺れ、立っていられないほどの眩暈が襲った。

（このままじゃ、まずい……！）

何か来る、近づいてくる。それは自分の姿を見せないように背後から迫ってくるだろう。

まずい、まずいこのままだと……！　内からガンガンと鐘を鳴らされているかと思うほどの頭痛と耳鳴り。静まった森のはずなのに、ざわざわと葉が音を鳴らして警告する。

森が、俺の体が教えてくれる。

『後ろを見てはいけない』と。

背後で何かが立ち止まる気配がした。冷や汗と動悸が止まらない。呼吸が乱れる。たかが夢のはずなのに、見ても何かが変わるってわけじゃないだろうに、なんで俺はこんな、

（怯えてんだ……！？）

自分で自分がわからない。なんでこんなに“怖い”と感じる？　なんでこんなに、

瞬間、頬から一筋、涙が零れた。

――悲しいんだ？

怖い、悲しい、――痛い。

……痛い？

突然首元が熱を持ったように痛みだした。触ってみると手に付いていたのは、

「……っ！？」

夥しいほどの真っ赤な血だった。

＊＊＊

「……っう…」

目を開ければそこはさっきいた場所だった。たくさんの本に囲まれたなか、ゼフィは痛みの残る頭を抱え、何とか立ち上がった。

（またあの、夢か……）

ガンガンと内から響いてくる痛みにゼフィは顔をしかめた。

暗くて深い、孤独な森の夢。とても嫌な夢だ、二度と見たくない。ゼフィは右手で首元を撫でると、そこには何の痛みも傷もなかった。もちろん血も流れていない。

「……」

当たり前だ、夢の出来事なのだから。あれは夢、ただの夢なんだ。そう自分を納得させる答えを出しても、心の隅に残った靄は消えない。

あまりにもリアルな痛みで、流れる血は酷く熱かった。それに反比例するように体は氷のように冷たくなる。まるでどこかで体験したかのように、現実味を帯びていた。

（そんなのあるわけねぇのに）

首を切られれば死ぬ。太い血管が幾つも通り、唯一頭と銅を繋げている場所なのだ。その首を深く切られればどんな生物だって息絶える。だからあれは夢なんだ。俺には何の関係もない。

ふと、机に置いてあった本に目をやった。『世界の神話集』その中の一つ、『竜と少女』

首を切られても死なないのは双頭の竜だけ。片方切り落とされても、もう片方があれば問題ないのだから。そんなお伽話を思い出していると、あの夢を見たのはこの話のせいなんじゃないかと思えてくる。そう思うとこの古びて傷んだ本が憎々しく見えてきた。

そんな忌々しい本を本棚に戻そうと歩んだ瞬間だった。

辺りの空気が一瞬にして冷えたのだ。

「……っ！！」

あまりにも突然な事態にゼフィは息を呑む。今の季節は確かに肌寒さがまだ残る頃だが、この寒さは異常だった。

背筋が凍り、悪寒が全身を駆け巡る。咄嗟にゼフィは窓の外を見た。

窓の外は暗かった。寝ていて気が付かなかったが、日はいつの間にか沈んでいた。

「……！」

違和感があった。

最初この部屋に来たとき窓はいくつか開いていたはずなのに今は――、

（全部閉まっている？）

寝ている間に誰か来たのだろうか？　いや、そんなはずはない。ここに来たとき誰もいなかったのだから。

――そう、人間は。

「いるんだろう、出てこい」

視線が背中に突き刺さる。ここに来て途絶えたものの、今感じるのは、

紛れもない殺意を込めた視線。

背後で空気が動く気配がした。――いる。人ならざるものが。いったいいつ、どうやってついてきたのかわからないが、それより気になることがあった。

赤い月は出ていないのだ。

赤い月が出ていなければ、霊はこちらの世界に干渉できないはず。だが背後にある気配は紛れもなく“いる”のだ。

（……っち）

心の中で思わず舌打ちをした。背後を取られている。変に行動した

らこちらが不利だ。
どうする――！！

「ねぇ」

それは酷く綺麗な声だった。透き通っていて、直に脳に響いているように感じる。声からすると女のようだ。

「助け…てよ、助けて……ヨ」

次第に壊れたラジオのように不快なノイズが混じった声に変化していく。霊が自我を剥き出しにし始めたのか。

「“助けて”……か」

剥き出しの殺意をこちらに向けておいて、よく助けを乞えるものだ。霊となって知能が落ちたのはわかるが、こちらからすればあまりにもくだらない。
――“助けて”など、死神に向ける言葉ではない。

背後の気配は、鋭い殺意をこちらに向けているが動く気配も、襲ってくる気配もない。――ならば、

霊には見えないだろうが、ゼフィは目を閉じた。意識をゆっくり闇へと浸透させる。揺蕩う意識の中、自分の中にあるもう一つの意識を呼び起こす。それは禍々しくドス黒い。贄を求めて荒い息を吐く様は凶暴な肉食獣のようだ。靄がかかっているようでその姿は確認できないが、闇の中、赤く光る二つの目だけは確認できた。
自分の中にいる化け物を自分のために利用する。飼いならした化け物は、鋭利で冷たい大鎌へと姿を変えるだろう。

ゼフィが目を開けた瞬間、それは赤く染まっていた。

風を切るより早く、大鎌を背後に向けて大きく振るう。同時に体を反転させ、攻撃態勢に入る。

赤く染まった瞳は、夜目がきく。視界が暗い今はその効果を存分に発揮するだろう。

音もなく静まった部屋は、自分がする呼吸音しか聞こえない。だが視線は感じる。ならば見えはしないがいるのだろう。姿を隠されてはどうしようもない。大鎌を闇雲に振るえば当たるかもしれないが、それではあまりに隙が多すぎる。殺意を向けられた今、それはあまりにも得策ではない。

右手の大鎌を強く握りしめ、周りを警戒しながら見渡す。

闇は次第に濃くなり、今いる場所を黒に染め上げる。前後左右の感覚がだんだんとわからなくなってくる。

霊の境界の作用か。いや、それにしたら妙な所がある。境界の中なら主たる霊が有利になるはず。なのになぜ、

（襲ってこない？）

何か目的があるのだろうか？　いや、たかが下級霊如きにそんな意思があるとは思えない。だとしたら――、

「……助、ケテ……」

掠れた呟きが耳に入る。

「ココ……カラ、出、シテ……」

「何を……」

馬鹿馬鹿しいことだが、つい聞いてしまった。返事が返ってくるとは思えないというのに。

「ココ、カラ……」

予想していた通り、霊は何かを訴えてくるものの先程の言葉を反復しているだけにすぎない。だから無駄なことなんだ。助けるなんてそんなことできない、最初から無理なことだ。
それはわかりきっているはずなのに、心の隅のどこかで居た堪れない気持ちになる。

（甘さは、捨てろ）

深く深呼吸をして自分を叱咤する。
そうだ、甘い考えを持っていたら付け込まれる。危機に晒されるのは自分だ。

――生きたくば、抗え。敵を喰らえ！

喰らえ、喰らエ喰ラエ喰ラエッ！！

そう考えれば、さっきまで考えていた雑念がなくなり思考がクリアになる。まるで自分が自分でなくなるような感覚に、一種の高揚感が生まれる。

（そうだ、俺は――）

大鎌が冷たく闇の中光った気がした。

口元が歪む。自分でも気付いている、多分俺は笑っているんだろう。

何に対して？　――自分の前に現れた獲物に対して。そうだ＞オレ＜は腹が減っている。早く贄を喰らいたいのだ。早く早く、この飢えを、渇望を満たさなければ。

――血ヲ、肉ヲ、魂ヲッ！！

頭の中で誰かの声がしたとき、闇の中に一閃、光が見えた。その筋は縦に大きく裂けていき、空間が露になる。

（ここ、は……？）

そこは静かでたくさんの本に囲まれていた。霊の境界を切り裂いて、元の場所に戻ってきたのか。ふいに全身から血の気が引いた。

自分の右手には大鎌が握られている。ここにいるってことはこの鎌で空間を引き裂いたのだろうか。無意識に。

手が、震える。鼓動が速くなり、息苦しくなった。それでも右手に吸いついて離れないように握られる大鎌から目が反らせない。

（俺は、何を……考えてた……？）

さっきまでの自分の思考が自分のものだと思えなかった。

霊を喰らう……って、そんなこと一度だって考えたこともなかったのに、さっきまでの自分は飢えていた。確かにそれだけはわかった。それは生物なら誰しもが持っている“食欲”に対しての本能だったのだから。

そんな馬鹿な、と思った。だがそれ以上に嫌な予感がした。
俺は人間で、霊を喰らいたいなんて思うわけない。……だったらあの時の俺は、

――霊に浸食されてた？

体の芯が凍ったような錯覚に陥った。

霊に浸食……？　俺が？　俺の中にいる霊は制御していると思っていたのにそうじゃなかったのか？　いや、だとしたら鎌を具現化させることなんてできないはず。
いくら自問自答しても答えなんか返ってくるはずない。自分でわからないのだから。

もう一度右手の大鎌を見つめる。漆黒で冷たい光を宿している鋭利な鎌を。左手で刃先をなぞっても何の感覚もない。実体があるのかないのかさえ、わからないところだ。だが闇さえも覆う漆黒は、その黒さのあまり見るものの感覚すら吸収してしまいそうだ。

ふいに刃先が青白く光った気がした。光など、窓から入る月明かりしか……。

（月……？）

窓に駆け寄り、外を見る。空は闇色に染まっているが、眩く光る半月が目に入った。

（本当に境界から出た、のか……？）

だったらあの霊はどこにいったのか。

そんなこと考える必要はなかった。

窓ガラスが背後を反射してそれを映しだしていたのだから。

真っ赤に染まった瞳と、本来白であるはずの部分が黒く染まり、淀んだ目をギョロギョロと動かしながらこちらを見る女を。

気付いた時には遅かった。窓ガラス越しにそれと目が合う。

それと同時だった。体が無数に切り裂かれたのは。

「……っぐうぅ！」

体を支えることができなくなり、その場に蹲るように足をついた。

全身鎌鼬にあったかのようにできた無数の切り傷から、生温かい鮮血が流れ落ち、床を紅く染めていく。

（あの場所から、どうやって……）

霊とは、数メートルは離れていた。なら直接の攻撃ではないのか。

それとも何か別な方法が……？

血を流しすぎたためか、意識が霞んでいく。考えがまとまらない。

頭がふらつき、視界が定まらなくなってくる。

（このままだと……）

畜生、油断した。だがこのままだと確実に殺される。早く攻撃を、鎌を。

右手には張り付くように鎌が握られている。その手には冷や汗がか

いており、ぬるぬるとした感触がした。いや、これは血かもしれない。そんなことをまだ考えている余裕に、我ながら苦笑してしまった。

（霊を消滅させねぇと、犠牲者が……）

霞む思考でそれだけを考えていた。境界でしか大鎌は具現化できないのに。境界が霊の存在範囲内なら、同じくこの鎌もそこでしか出すことはできない。霊を消滅させるには境界の範囲内でやるしかないのだ。だから早く――、

そこで思考は止まった。途端に胸の奥で今まで感じたことのないようなざわめきが起こる。

自分の右手にある鎌を握りしめる。確かに存在している。窓からは月明かりが見える。赤い光ではなく、黄金に輝く眩い明かりが。自分の背後には霊がいる。あれから何もしてはこないが気配でわかる。殺気が背中に突き刺さる。

（おかしい……）

おかしいのは最初からだ。そんなことはわかりきっていた。だが違う、そうじゃない。大鎌が存在してるんだ、ならここは、――まだ霊の境界の中じゃないか。

空間は切り裂いたはず、その証拠に暗闇から抜けだしたんだ。だが鎌は存在していいる。どういうことだ……。霊が幻でも見せたのか。それとも最初から俺は暗闇にいなかったのか。

思考がまとまらないことに焦りが浮かんでくる。だが今はそんなこと考えている暇じゃない。早く霊を、消滅させ……、

その時、部屋を照らしていた明かりは消え、一時的に暗闇に呑まれた。

「……助ケテ」

か細い声が鼓膜を揺らした。

人を切り刻んでおいて、何未だに助けを乞うんだろうかこの馬鹿は。

右手に力を込める。霞む意識の中、ゆっくり背後を振り向いた瞬間、部屋は再び明るく染まった。

黄金ではなく、妖しい赤色へと――。

「うそ、だろ……？」

この光は、この赤は、あの満月の光じゃないか……。

そう思った瞬間、再び体に衝撃が走った。鋭利な刃物に直に切り裂かれたような衝撃に今度は耐えきれなかった。

最後に瞳に映ったのはあの霊の顔。だがその表情はわからなかった。

確認する前に意識はぷつりと途切れ、闇へと落ちた。

＊＊＊

同時刻、第二階層。

（いったいいつまで待たせるんだよ……）

シータは未だに身動きが出来ずにいた。隠れてやり過ごしたのは

いいものの、不法入国で指名手配となっている自分が見つからないことにあちらも躍起になったのか、昼間より多くの警備員がこの第二階層に集まっていた。これでは出るに出られない。シータはまさに絶体絶命の危機に陥っていた。

（しかも……）

小さな隙間から目を凝らせば、僅かに見える。今、シータが隠れているポリバケツの目の前にいるのだ。警備員様が。これでは出るどころか、物音一つ立てられないではないか。

（どうしよう、どうすればいいんだろう）

だが選択肢は“待つ”の一点しかないのは重々わかってはいた。わざわざオリンピアに捕まりに来たわけではない。だから今ここで諦めて出るわけには絶対いかないのだ。これはもはや意地と言ってもいいだろう。その意地をいつまで続けなければいけないのか、シータ自身わからないが。

（とりあえず我慢だ我慢……）

そう固く決意したとき、自分が入っているポリバケツが揺れた、というより蹴られた。突然の衝撃に思わず悲鳴が出そうになったが、すんでのところでこらえた。

「……ったく、いつまでこんなことしてんだか」

独り言か、小さな呟きだったがシータの耳に届くには十分だった。どうやら目の前にいるこの男が何やら愚痴を呟いているらしい。

「ガキの一人くらいどうでもいいじゃんねーか。どうせ何も出来やしねぇのによぅ……」

そのガキとは確実に自分を指している。この呟きをその本人に聞かれているとは夢にも思っていないだろうこの男は。
なぜだろう、居た堪れない気持ちになるのをシータは感じた。

「あー、こちとら休日出勤だっつーのに！」

（それは……、ごめんなさい）

心の中で小さな謝罪を言いながら、シータは僅かに出来た隙間を閉じた。
今はこの男がどこかに行ってくれることを祈ろう。

「あーあ、ったくよぅ。……ってあ？」

男の声がマヌケなものに変わった。そして次の言葉は今までとは違い恐怖に震えている。

「あれって……、う、嘘だろ……っ！？」

男が何に対して怯えているのかシータにはわからなかった。興味がないといえば嘘になるが、興味本位で蓋を開けて見つかったら洒落にならない。シータにとってはそっちの方が断然恐怖だ。
だが次の言葉にその恐怖が別なものへと移った。

「あ、あ、あか、あかい、【赤い満月】が……っ！！」

（えっ？）

思わずシータは耳を疑った。
【赤い満月】だって？　そんなのあるわけない。この前が満月だったのだ。あの満月の日に何が起きたのか忘れるわけない。そんなに満月の日があってたまるもんか。それに今日は半月のはずだった気がする。

だが男の声は嘘に聞こえなかった。本当に怯えているようだった。オリンピアにいれば尚更、あの田舎に位置するブラックストリートでさえ、【赤い満月】の噂は届いている。

赤い満月の晩に人が消え、新月の晩に死体として戻ってくる――と。

本当に赤い満月が出ているのかシータは気になった。もし出ていたなら大変なことになる。ゼフィに知らさなければ。出ていなかったならそれでいい。隠れるのを続行するだけだ。
蓋の位置を気付かれないようにほんの少し開けようとした瞬間、得体のしれない恐怖がシータの全身を凍らせた。

（な、に……これ……！？）

言葉にならない、本能からくる恐怖に体が硬直した。指先一本まともに動かせない。

――いや、動いたら見つかるかもしれない。

ブラックストリート出身のシータの勘がそう告げていた。

「ネェ」

それは掠れたラジオのような音で不快、いや恐怖の方が大きく耳についた。しゃがれた声は人間の発するものには到底聞こえない。まるで古いビデオテープに録音されたものを再生しているようなものだった。

たった一言発した声のようなものに、シータは酷く怯えた。震える体を抱きしめ、目を固く瞑る。

その時だった。

「ぎゃあぁあぁあっ！！」

（……っ！！？）

すぐ近くで大きな悲鳴が聞こえた。この悲鳴は、――先程の男のものだ！

男の身に何が起きたのか、それはさっきの声と【赤い満月】に関係しているのだろうか。確かめようにもシータには出る勇気がなかった。

――そう思っていた。だがシータは気付いてしまった。

（あ……）

先程蓋を開けようとしたとき、そのときのせいだろうか。少し、ほんの少しだけ蓋が外れていた。だが指先一本入るか入らないかの小さな隙間、これでは外を見ることなど不可能だ。

ゴキンッ！

そのとき奇妙な音がした。
何かが折れたような、とても嫌な音。
この音は何だろうか？
そんなこと考えるまでもなかった。
少しだけ開いた隙間から濃く、生々しく臭ってくるのは、……血の臭いだ。
濃い血の香りを嗅いだとき、また奇妙な音がした。今度は先程のそれとは違う。ボリボリと何か固いものを歯で噛み砕いているような音に近い。
まさか、とシータは思った。と同時にそれを想像してしまい、全身から血の気が引いた。体と頭が氷のように冷たく凍りついた。
（食…べて、“人間”を食べて……る……！？）
そんな、ありえないことだ。……だが、“ありえないことが起こる”のだとしたら？　【赤い満月】が本当に出ていたら？　それは十分に“ありえる”ことになるだろう。
でもなぜ【赤い満月】が今出ているのだろう。それこそ本当にありえないことなのだ。【赤い満月】は自然系まで影響を及ぼすのだろうか？
混乱しきった頭で必死に答えを探そうとしたとき、突然音は鳴り止んだ。
（まさか……、見つかった……？）
途端に緊張が走る。呼吸音さえも響かせないように、シータは必死

で口に手の平を押しつけた。

「助ケテ……、ココカラ、出シテ……」

酷く悲しげで、苦しそうな声が直接脳内に響いた気がした。
その瞬間、重苦しく辺りを包んでいた嫌な気配がすうっと消えたのを感じた。

それでもシータの震えは止まらず、ただこれが夢であるようにと祈り続け、その場に留まることしかできなかった。

＊＊＊

第二階層、図書館にて。

「……っ……う……」

自分が流した血だまりに沈みながら、ゼフィはゆっくりと自分に感覚が戻ってくるのを感じた。ゆっくり右手を動かせば反応はある。指先が動く感覚も、握られた鎌の冷たさも現実のものだった。

（血、流しすぎたか……）

傷口は今こそ完全に塞がれたものの、流した血の量はそれなりのものであった。床は夥しい血で赤く染め上げられていて、噎せ返るような濃い血臭が鼻についた。この特殊な体じゃなかったら死んでてもおかしくないほどだ。

霞む意識を何とか集中させ、ふらつく体を起して立ち上がる。
窓の外を見れば、……やはり赤い満月が妖しく、神々しくその姿を

闇に浮かしていた。

（……っ）

内心舌打ちをした。やはり全ては現実のものなのだ。この際赤い満月がなぜ現れたのか、そんなことはどうでもいい。それよりあの霊はどこに行った？　あれは他の、今までの霊とは遥かに異なっている。早く滅さなければ多くの犠牲者が出てしまう。

動きにくい体を叱咤し、鎌を強く握りしめる。

あの霊はここにはいない。だとしたら、

「外に出たのか？」

ここが境界の中ならば、贄に選ばれたのは自分になる。だが殺されなかった。自分が贄なら殺されて魂を喰われるか、体を盗られるか。どちらにせよ殺されることには変わらないはず。だが現に自分は生きている。あの霊は俺が生きていることに気付かなかっただけか。

（それとも、別の贄を探した……？）

あの霊の目的がわからない。恨み、憎しみ、怒り、悲しみ。どの念でこの世に留まっているのだろうか。それもかなり強い力で。

『助ケテ、ココカラ出シテ』

あの霊はそんなことを呟いていた気がする。

今思えば不自然だと感じた。あの霊は肉体を持っていた。だとしたら既に一人は贄として殺したということになる。それは自らの意思で、のはずだ。そうだとしたらなぜ、助けを乞う必要がある？　“

ここから出して”などまるで、

――何者かに無理矢理肉体を与えられたかのような。

「まさか、な……」

声に出してそれを否定した。そんなことあるわけない。そんな、狂気染みたことあるわけない。

頭を軽く振り、雑念を払い、今すべきことだけに意識を集中させる。

俺のやるべきこと、それは――、

霊を消滅させることだ。

＊＊＊

ここが境界の中なら、霊を宿している自分の体は普通よりも身体能力がずば抜けて上がる。だから多少の無理も何とかなる。窓を開けてそこに足をかけた。わざわざ階段を降りるなんて回りくどいことなんてしない。二階ぐらいの高さなら大丈夫だ。問題ない。

身を乗り出し、体の半分以上を出したところで、“あること”に気がついた。

思わずそのままの体勢で体が固まってしまう。

（な……んで……！？）

町の様子が変だ。いや変ではない。寧ろ至って普通なのだ。夜の

闇を照らすようにあちこちに街灯が光り、道を照らしている。家だってそうだ。明かりが付いていて人影も見える。なにより道を行きかう人々がいるのだ。当たり前の光景が当たり前じゃない。

（ここはいったいどこだっ！？）

そんな疑問が浮かぶほどにゼフィは動揺していた。

ここは境界のはず。右手に握られた大鎌と、この治癒力が何よりの証拠だ。だがこの第二階層は何も変わっていない。

もう一度“霊の境界”について頭の中で整理してみる。

霊の境界。主になる霊が空間を作りだし、己の支配下に置ける環境のことだ。いわばあの世とこの世の境目といえる空間。生者と死者が同時に存在できる場所。だが所詮は霊が支配する空間、迷い込んだ生者は霊に見つかれば贄として食われるか、上手く忍んだとしても、この異空間に居続ければ浸食を受け、永遠にここを彷徨う亡霊になる。どちらにせよ、生きて出られる確率はほとんどない。万が一出られたとしても、人形症候群を発症してこの先の人生は大きく狂うことになる。

それが境界。そして境界とこの世を結ぶ役割をしているのが赤い満月と新月の日の夜。

赤い満月は“入り口”、新月は“出口”のはずだ。少なくとも今まではそうだった。

だが今この瞬間は異なっている。赤い満月の日は、ありえないことが平気で起こる。その度に常識は覆させられた。だがそれでもこの状況だけは、本当にありえなかった。

（こんな、町のど真ん中であの霊が暴走したらただじゃ済まねぇぞ……！？）

焦燥感だけが先走り、考えがまとまらないことに更に焦りが生まれる。負の連鎖だ。手足が震える。脳が直に氷に触れたように冷たくなってくる。

（あのとき、俺が消滅させていれば……っ）

こんなことにはならなかったのかもしれないのに。もしかしたらもう犠牲者が出ているかもしれない。だとしたら尚のこと、早く動いて対策を練らなければ。

奥歯を強く噛みしめる。早く何とかしなければ、迷っている場合じゃないんだっ！！

気付いた時には、二階から飛び降りて夜の街をゼフィは駆けていった。

＊＊＊

第二階層、路地裏。

シータは目を固く閉じ、耳を塞いでいた。さながら現実から逃げるための手段といったところか。だがそれでも鼻に付く濃い血臭を避けることはできなかった。鼻から息を吸わないようにと思っても、今度は体の奥から吐き気が込み上げてきて、結局はこの臭いに耐えるしかなかった。

いつまでこの悪夢は続くのだろうか。終わりはくるのだろうか。そう思いながらも、シータは何もできずにただ体を丸めて怯えること

しか出来なかった。

そんな時だった。

微かに地面を蹴る音がシータの耳に入った。

（まさか……！？）

さっきの得体の知れない何かが戻ってきたのだろうか？　そう考えたら全身から冷や汗が吹き出し、動悸が激しくなるのを感じた。なるべく音をたてないようにと気をつけたつもりだったが、その足音は確実にこちらに近づいていき、ぴたりとすぐ傍で止まった。

（……っ！）

出来ることなら、今すぐこの場を飛び出して逃げ出したかった。だが死ぬかもしれないという恐怖と、得体の知れない何かがいる手前、シータには結局何も出来はしなかった。

「……ッ！　くそっ……！」

声が、した。

それは何かに憤っているような、そして焦りを含んでいる声。それ以上にこの声に聞き覚えがあった。

思わずその声の持ち主の名を口にした。

＊＊＊

境界の中で飛躍的に上がる五感の一つ、嗅覚を集中させれば、微かな血の臭いが鼻についた。

（既に犠牲者が……）

まだ犠牲者かどうかはわからない、がどうしても嫌な方へと考えがいってしまう。

（頼む、どうか――）

無事でいてくれ。

人通りが少ない方へと行けば、先程の血臭が濃くなるのを感じた。この辺りに人の気配はない。悪い考えだけが脳裏を廻る。細く目立たない路地裏へと、自然と足が進んだ。それにつれて濃い血臭が鼻に付き、そして――、

「……ッ！！」

思わず目を背けてしまった。

今まで境界で憑かれた人間や死体は腐るほど見てきた。その中には当然奇形しているものや腐ったものもあったが、これは……。

警備員だったのだろうか、灰色の軍服はぐっしょりと赤く染まっている。元の色がわからなければ誰も赤い服だとしか思えないだろう。夥しいほどの血だまりに沈んだ死体は、まだ殺されたばかりなのか時折びくびくと痙攣していた。口からは、血とだらしなく伸びきった舌が力なく垂れている。

ここまでなら許容範囲だ。だがそれ以上にこの死体は惨たらしかった。

最初に目についたのが頭部。頭部が、……ないのだ。ぱっくりと割れたそこには脳があったのだろう。今は空洞になって血が溜まっている。脳を守るはずの頭蓋骨はこんなにも脆かっただろうか。あちこちに散らばっている白い欠片がやたら目についた。血濡れの頭部から視線を下にずらすと、両目があるはずのそこはぽっかりと空洞になっている。目を抉られたのか。鼻も、頬の肉も抉り取られている。首に関しては、皮一枚で繋がっていると思えるほどだった。体にも無数の切り傷があった。鋭いナイフで切り裂かれたような傷が服の上からでも確認できた。

「……っ」

あまりの惨劇に言葉を失う。
これは、本当にあの霊がしたことなのだろうか？
いくら肉体を持っているからといってここまで出来るのか？
こんな惨たらしいことは、明確な意思がなければできない。あの霊にそれは――、感じられなかった。

（どう、なってんだよ……っ！）

「……ッ！　くそっ……！」

やり場のない怒りが思わず口に出る。だがそれ以上に焦りが上回る。これ以上犠牲者を出すわけにはいかない。早く何とかしなければ。そう思うのに足が地面に根付いたように動かなかった。

（俺に、出来るのか？　あの霊を消滅させることが……）

あれは今まであったどれとも違う異なる存在。危険は未知数。これ

以上犠牲なしであれを消滅させることは出来るのか。敵の目的も攻撃方法もわかっていないというのに。

――だが迷っている暇などない。

ここには手掛かりはもうないだろうと踏んで、踵を返そうとしたそのとき、

「……ゼフィ…さん……？」

「……っ！！」

馴染み深い声が耳に届いた。

「……シータ？」

まさかとは思ったが、今の声はシータのものだった。だが周りを見渡しても姿はない。どこかに隠れているのだろうか。それを確証つけるように、側にあったポリバケツががたりと揺れた。手にしていた大鎌を意識して黒い点に戻すと、それは辺りの空気に溶け込むようにして消える。ポリバケツの蓋に手を伸ばし、開けようとした瞬間と同時に蓋が外れ、中から人が飛び出してくる。

「ゼフィさんっ！　よかっ……、会えて本当に……」

淡い緑色の目が安堵を込めてゼフィを見上げた。まさかこんな所に隠れているとは思いもしなかった。シータの体格だから為せる技なのか。

「お前、今までここにいたのか……？」

「そうだよっ！　だってゼフィさんいつまで経っても来ないし、警備員がいるから出れないし、それに……」

シータが口籠り、視線をずらそうとした。その先にあるものを見つめてか、シータの顔色が急激に青くなる。

その視線を遮るようにゼフィはシータの前に立つと、シータの肩を押し、無言でまたバケツの中にいるように促す。

「ゼフィさん？」

ゼフィらしからぬ行為に不安を煽られてか、シータの瞳からは安堵の色が消えていた。

「ここにいろ。絶対に……、絶対に俺が来るまで外には出るな」

いいな、と更にゼフィは念を押した。その声音は焦燥が混じり、シータを更に不安にさせる。

「今、何が起こってるの？　このオリンピアでいったい何が……？」

「わからない……。ただ、今ここは安全じゃない」

シータの問いに曖昧な返事をしながら、ゼフィは暗闇を見上げた。その闇を不気味に引き立てるように、赤い満月は爛々と輝いている。

「何で赤い満月が……」

シータは力なくぼそりと呟いた。

全ての元凶であろう赤い満月がなぜ現れたのか。――今はそれを気

にしている場合じゃない。

「シータ。俺は霊を探して消滅させる。だからそれまでお前は隠れているんだ」

霊、という単語にシータはびくりと反応した。シータ自身もうわかっているはずだ。この異常な事態が。ありえないことが平気で起こる悪夢に、自分たちが今いることを。

「ゼフィさん……」

シータの声は消え入りそうなほど弱かった。

「大丈夫、俺がなんとかする」

“大丈夫”という言葉を使ったのは少しでもシータから不安と取り除かせようとする思いからか、それとも自分を宥めるための言葉だったか。今は、それさえもわからなかった。

シータは何か言いたそうな顔をしたが、ゼフィはそれを無視し、中に入って隠れるように促す。安心させるように微笑んで見せたが、ちゃんと笑えてただろうか？

蓋を閉め、再びゼフィは歩きだす。

暗い闇に向かって、ただ目的を遂行させるために。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4283x/

---

人形症候群

2011年11月16日10時08分発行